

火薬船

海野十三

青空文庫

怪貨物船あらわる！

北緯二十度、東経百十五度。

——というと、そこはちようど香港ホンコンを真南に三百五十キロばかりくだった海面であるが、警備中のわが駆逐艦くちくかん松風は、一せきのあやしい中国船が前方を南西へむかつて横ぎっていくのを発見した。

「——貨物船。推定トン数五百トン、船尾に“平靖号”へいせいごうの三字をみとむ……」

と、見張兵は、望遠鏡片手に、大声でどなる。

艦橋には、艦長の姿があらわれた。そしてこれも双眼鏡をびたりと両眼につけ、蒼茫そうぼうとくれゆく海面に黒煙をうしろにながくひきながら、全速力で遠ざかりゆくその怪貨物船にじつと注目した。

「商船旗もだしておりませんし、さつきから観察していますと、多分にあやしむべき点があります」

副長が、傍から説明をはさんだ。

艦長は、それを聞いて、双眼鏡をにぎりしめ、ぐつと顎あごをむこうへつきだした。

「追え！」

命令は下つたのだ。

駆逐艦松風は、まもなく全速力で、怪船のあとをおいかけた。艦首から左右に、雪のよ
うな真白な波がたつて、さーつと高くたか後へとぶ。

一体あの怪中国船は、どこの港から出てきたのであろうか。どんな荷をつんで、どこへ
いくつもりなのであろうか。いま怪船のどつている針路からかんがえると、南シナ海をさ
らに南西へ下つていくところからみて、目的地はマレー半島でもあるのか。

小さな貨物船は、速力のでんで到底わが駆逐艦の敵ではなかった。ものの十分とたたな
い間に駆逐艦松風は、怪船においつき、舷と舷とがすれあわんばかりに近づいた。

駆逐艦のヤードに、さつと信号旗がひるがえつた。

「停船せよ！」

怪貨物船は、この信号を知らぬかおで、そのまま航走をつづけた。甲板かんばん上には、たつ
た一人の船員のすがたも見えない。さつきまでは、そうではなかった。双眼鏡のそこに、

たしかに甲板にうごく船員のすがたをみとめたのに。

停船命令を出したのに、怪船がそれを無視してそのまま航走をつづけるとあっては、わが駆逐艦もだまつているわけにはいかない。副砲は、一せいに怪船の方にむけられた。撃ち方はじめの号令が下れば、貨物船はたちまち蜂のすのようになって、撃沈せられるであろう。雨か風か、わが乗組員は唇をきつとむすんで、怪船から眼をはなさない。

それがきいたのか、怪船はにわかにも速力をおとした。それとともに、甲板のものかげから、ねずみのように船員たちがかおを出しては、また引っこめる。

岸少尉きしを指揮官とする臨検隊りんけんたいが、ボートにうちのつて、怪貨物船に近づいていった。むこうの方でも、もう観念したものと見え、舷側げんそくから一本の繫梯子けいはしごが下り下げられた。わがボートはたくみにその下によつた。

岸少尉を先頭に、臨検隊員は、怪船の甲板上におどりあがった。

「帝国海軍は、作戦上の必要により、ここに本船を臨検する」

中国語に堪能な岸隊長は、船員たちのかおをぐつとにらみつけながら、りゅうちよ流暢な言葉で、臨検の挨拶をのべた。

そのとき、甲板にぞろぞろ出て来た船員たちの中から、半裸の中国人が一人、前にでて、

「臨検はどうぞ御勝手に。その前に、船長がちよつと隊長さんにお目にかかりたいと申し、このむこうの公室こうしつでまっています」

「なに、向うの室へ、船長がいというのか。なかなか無礼なことをいうね。用があれば、そつちがここへ出て来いといえ」

「はい、それがちよつと出られない事情がありまして、ぜひにまげて御足労をおねがいし、ろとのことですよ」

「出て来られない事情というのは何か。それをいえ」

岸隊長は、まるで母国語ぼこくごのように、中国語でべらべらいまくる。

そのとき、かの半裸の中国人は、一步前に出た。ひそかに岸隊長にはなしをするつもりだつたらしいが、隊長の部下がどうしてこれを見おとそうか、剣つき銃をもって、隊長の前に白刃のふすまをきずいた。

「とまれ！」

もう一步隊長の方へよつてみる、そのときは芋ぎしだぞというはげしいいきおいだ。

「あッ、危ねえ！」

かの半裸の中国人は、飛鳥ひちょうのように後へとびさがったが、そのとき臨検隊の一同は、

おやという表情で、その中国人のかおをみつめた。それも道理だ。その中国人が、
 「あッ、危ねえ！」と、きゆうにあざやかな日本語をしゃべったからである。

「やつ、貴様は何者！」

岸少尉は、相手をにらみすえた。

ふてぶて
 太々しい若者

「いや、どうも。びっくりしたとたん、ぼけの皮がかわはがれるとは、われながら大失敗でありました。はははは」

と、半裸の若者は、頭をかいてわらう。びっくりしたけしき気色はさらに見えない。見なおすと、この男、わかいながらなかなか太々しいところが見える。

だが、こっちは岸隊長以下、すこしも油断はしていなかった。中国人が、急にまぎした巻舌の東京弁でしゃべりだしたのは、ちよつとおどろいたが、わけのわからないうちに安心は

しない。

「わらうのは後にしろ。貴様は何者か」

岸隊長も、こんどは日本語でどなりつけた。

「やあ、どうもわが海軍軍人の前でわらってすみませんでした」

と、かの若者は頭を下げ「私は四国の生れで 竹見太郎八たけみたろうはちという者です。この貨物船平靖号の水夫すいふをしています」

「ふん、竹見太郎八か、お前、なぜこんな中国船の水夫となつてはたらいっているのか」

「はい。私はなにも申上げられません。しかし、さつきも申しましたとおり、船長があなたにお目にかかりたいといつていますから、まげて船長の公室こうしつへおいでくださいませんか。これにはいろいろ事情がありまして……」

水夫竹見は、俄にわかにていねいになつて、岸隊長をうごかそうとする。その熱心が、彼の顔にはつきりあらわれているので、隊長もその氣になつて、彼に案内をめいじた。

このような小さな貨物船に、船長の公室があるというのも笑止千万であるが、ともかくも岸隊長は、隊員の一部をひきつれて、竹見のあとにつづいて公室の入口をくぐつた。そこは船橋のすぐ下で、船長室につづいた室だった。

入つてみて、またおどろいた。

室内は、こんな貧弱な船に似合わず、絢爛眼をうばう大した装飾がしてあつて、まるで中国のお寺にいったような気がする。入口をはいったところには、高級船員らしい七八人の男がきちんと整列していて、隊長岸少尉のかおを見ると、一せいに拳手の礼を行った。室の真中に、一つの大きな卓子テーブルがある。その前に、一人の肥満した人物が、ふかい椅子に腰をかけている。

「さあ、どうぞこちらへ」

と、その肥満漢ひまんかんは手をのぼして、隊長に上席じょうせきをすすめた。混じり気のない立派な日本語であつた。どうやらこれが船長らしい。だが船長にしろ、椅子にこしをかけたまま、帝国軍人に呼びかけるとは無礼至極であるとおもつていると、かの肥満漢は、

「私は脚が不自由なものでしてナ、お迎えにも出られませんで、御無礼ごぶれいをしておりますじや。この汽船の船長天虎来てんこうらいこと淡島虎造あわしまとらぞうでござんす」

と、ていねいに挨拶をしてあたまを下げた。

脚が不自由だという。見れば、なるほどこの虎船長の両脚は、太腿のところからぶつりと両断されて無い。

このように脚が不自由だから、岸隊長を公室までまねいたことが一応合点がってんがいった。しかしいくら脚が不自由でも、この船長だつて出てこられないはずはないのだがと、岸隊長はどこまでも、こまかいところへ気を配りつつ訊問じんもんにかかった。

「本船のせきは、日本か中国か」

「もちろん日本でございます」

「日本船なら、なぜ船尾に日章旗を立てないのか」

「おそれ入りますが、これにはいろいろ仔細しさいがございまして……」

と、かの虎船長は一揖いちゆうして、きつと形をあらため、かたりだしたところによると、

「——この平靖号は、中国から分捕った貨物船でありまして、はらいさげ 払下 手続をとって手に入れたものであります。この汽船には四十八名の乗組員がおりますが、どれもこれも中国語をよくあやつる。しかしそのうち八名を除いて、のこり四十名はいずれも生粋きっすいの日本人でございます。そこに立つております高級船員たちも、どこから見ても中国人ですが、これがみな日本人なんで、商船学校も出た者もおりますし、予備の海兵も混っております」

虎船長は、そういつて後の船員たちを指した。岸隊長は、あらためて高級船員の面をじ

つと見まわしたが、なるほど、眼の光だけは炯々^{けいけい}として、新東亜建設の大精神にもえて
いることがはつきりと看取される。

「本船の目的は、どこか。また、なぜこんなに、すっかり中国式になっているのか。日本人らしい装飾も什器も、なんにもないではないか」

岸隊長は、疑問のてんをついた。

「はい、本船の目的と申しますのは、日本を飛びだして日本に帰らないということにあります。われわれ一同、こせこせした日本人に嫌気^{いやげ}がさし、日本人を廃業して中国人になり切り、南シナ海からマレー、インドの方までもこの船一つを資本として、きのうは東に、きようは西にと、気ままに航海をつづけようというのであります。積荷は、ことごとく中国雑貨と酒です」

日本人を廃業するんだとは、船長なかなかすごいことをいいたしたものである。そういつておいて、船長はじつと岸少尉の顔色をうかがっていた。

「日本人を廃業して、ふたたび日本にかえらないというのか。ふん、なるほど」

岸少尉は、わかいがさすがに思慮ある士官、べつだんいやなかおもせず、船長のおもてを見かえして、

「あれは今から一ヶ月ほど前のことだったか、長崎県の或るさびれた禅寺ぜんでらにおいて、土地の人がびつくりしたくらいほうえの盛大な法会が行われたそうだね」

と妙なことを岸少尉はしゃべりだした。

「はあ、そうでしたか」

「そうでしたかというところを見ると、貴公きこうは知らないと見えるね。——その法会に参加した人数は五十人あまり、法会の模様からさっすると、これは団体的葬儀の略式なるものであったということが分った。その中に一人、容貌ようぼう魁偉かいいにして、ももより下、両脚が切断されて無いという人物が混っていたそうだが、そういうはなしを貴公は聞いたことがないか。なんのためのひめたる団体葬儀であろうか。仏の数が五十人あまり、参会者もまた同数の五十人あまりだという。一体だれの葬儀なのであろうか」

岸少尉のかたるうちに、途中で一度、虎船長は、はつと思つた様子だが、少尉がかたりおわるや、からからとうち笑つて、

「はつはつはつはつ。世間には、どうもまぎれやすいはなしがあるものすな。両脚のない人間も世間には何百人といるんですぞ。団体葬儀だなんて、それは誰かの早合点はやがってんでありましょう」

と、少尉のいうことを盛んにうちけす。

「はつはつはつ」と、こんどは岸少尉がうちわらつて

「こうやって見まわすと、この船の乗組員たちは、どういふものかそろいもそろつて、頭の天頂てっぺんの附近に二銭銅貨大の禿はげ——禿ではない、毛が生えそろわなくてみじかいのだ、それが揃いも揃つて目につく。第一貴公のあたまにも、妙なところに山火事のあとみたいなものがあるではないか。さつきいつた長崎の禅寺へ、五十人ほどの参会者がそろいもそろつて毛髪をそつて、納めていつたそうだが、ずいぶん世間には、こまかいところまでつじつまのあう不思議なはなしがあるものだねえ」

これを聞くと、虎船長は、目を白黒。おもわず両手で椅子からとび下りようとしたが、結局それをあきらめて、

「ふふん、ふふふ。ふふふふ」

と、妙なわらい方をした。隊員一同も、わらいもできず、くすぐったいかおをして唇をかんでいる。臨検隊員は、少尉の言葉のいみをやつと諒解して、ものめずらしげに一同のかおを端から端へいくどもじろじろとながめやる。向うの一団は、いよいよ顔のやり場にこまっている様子だ。

そのとき岸少尉は、キツと形を改め、そうちょう莊重なこえで、

「臨検は、これで終了した。なお、おわりに四十何人かの生ける亡者どのの健康をしゅくし、そしてその成功をいのつてやまぬ。おわり」

そういつて少尉は、隊員をひきつれ、さつきと公室を出ていった。

少尉たちの靴音が甲板へきえても、虎船長はじめ公室の一同は、その場を石のようになごかなかつた。どこからか、おえつ嗚咽のこえがもれた。するとあちちでもこっちでも、すすりなきのこえが起つた。拳でなみだをはらっている者もある。感激のなみだだ！

生ける屍しかばねとなつて、ひめられた或る使命のために壮途につこうという虎船長以下は、はからずも臨検の海軍軍人からげきれいの言葉をうけ、感激のなみだは、あとからあとへと湧きいでて尽きなかつたものだ。

「おい、おおくりしよう。わしを抱いてつれていけ」

虎船長がさげんだ。

船員たちは、へんじをするよりはやく、脚のない船長を両脇からいだきあげ、甲板へつれていった。そのとき臨検隊長岸少尉は、舷側におろされた繩梯子なわばしこを今手をかけて下りようとしたところだったが、虎船長があらわれたと知って、つかつかと後へ戻り、無言のまましかとその手をにぎった。そのときである。副隊長の兵曹が、

「あつ、岸隊長。本艦から至急帰還せよとの信号です。別な船が一せき、南方にあらわれました」と、こえをかけた。

このとき平靖号が、はからずも一つの大失敗をやったことが、後に至って思いだされることとなったが、まだだれも気がつかない。

ノールウエーの汽船

「あつはつはつ。さすがの海軍さんも、この平靖号にあきれてかえつたようだな」

例の大々しい水夫の竹見太郎八は、ふてぶて甲板かんぼんのうえにはらをゆすぶつてからからとわらう。

「ちえつ、自分のことをたなにあげて、なにをわらうんだよ」

すぐ横槍が入った。それは、デリックの下したにあぐらをかいて、さつきからのさわぎをもうわすれてしまった顔附で、せつせと釣道具の手入れによねのない丸本慈三まるもとじぞうという水夫が、口を出したのである。

「な、なにをツ」

「なにをじゃないぜ。さつきお前は、もうすこしで水兵の銃剣にいもぎしになるところじやつた。あぶないあぶない」

この丸本という水夫は、竹見の相棒だった。年齢のところは、竹見よりもそんなに上でもないのに、まるで親爺おやじのような口をきくくせがあった。この二人の口のやりとりこそ、はなはだらんぼうだが、じつはすこぶるの仲なかよしだった。

「なんだ、丸本。貴様は俺がいもぎしになるところをだまってみていたのか。友達ともだち甲斐がいのないやつだ」

「ははは、なにをいう。お前みたいなむこう見ずのやつは、一ぺんぐらい銃剣でいもぎしになっておくのが将来のくすりじやろう。おしいところで、あの水兵……」

「こら、冗談も休み休みいえ。あの銃剣でいもぎしになれば、もう二度とこうして二本足で甲板に立っていられやせんじやないか」

「そうでもないぞ。あの、われらの虎船長を見ろやい。足は二本ともきれいさっぱりとないが海軍さんを見送るため、ああしてちゃんと甲板に立った。お前だって、いもぎしになつてもあれくらいのみねはできるじやろう」

「おお虎船長！」

と、竹見太郎八は、なにかをおもいだしたらしく、

「そうだ、俺は虎船長に用があつたんだ。おい、ちよつといつてくるぞ」

水夫竹見は、軽く甲板を蹴つて、船橋へのぼる階段の方へ歩いていった。

船橋では、虎船長をはじめ、一等運転士や事務長以下の首脳者が、しきりに、はるかの海面を指して、そこに視線をあつめている。

「おお、あの船が、やつと旗を出した」

「なるほど、あれはノールウエーの旗ですな、ノールウエーの船とは、ちかごろめずらし

い」

いま船橋で話題にのぼっているのは、さつきまでこの平靖号を臨検していたわが駆逐艦が、その臨検中に見つけた新しい一隻の怪船のことだった。わが駆逐艦は、その間近かにせまっている。そのとき怪船は、とつぜんノールウエーの国旗を船尾にさつと立てたのである。

「どうもあのノールウエー船はあやしいよ。むこうも貨物船だが、あのスピードのあることといったら、さつきは豆粒ほどだったのが、今はこうして五千メートルぐらいに近づいている」

「ノーマ号と、船名がついていませんぜ、一体なにをつんで、どこへいく船なのかなあ」

「きつと軍需品をつんでいるよ、あのかっこうではね。たしかにあやしいことは素人にもそれとわかるのに、ノールウエーでは、海軍さんも手の下し様くだようがないんだろう」

「残念、残念。宣戦布告がしてないと、ずいぶんそんだなあ」

幹部たちは、ノーマ号と名のるノールウエー船のうえに、すくなからぬ疑惑をもって、ざんねんがったのである。

はたして、一同が見ているうちに、わが駆逐艦松風は、ノーマ号からはなれ、舳へさきをてん

じて北の方へ快速力で航行していった。

ノーマ号も、その後を追って北上するかとおもわれたが、どうしたものか、急に針路をかえ南西に転じた。

「あれっ、こつちと同じ方向へいくぞ！」

事務長が、目をぱちくりとやった。

「おい、へんだぞ。ノーマ号は、一向前のようなスピードを出さないじゃないか」

足のない虎船長がさげんだ。

「これじゃ、間もなく本船は、ノーマ号においてしまいますよ。なにかむこうは、かんがえていることがあるんですな」

頭のいい一等運転士の坂谷^{たかたに}が、早くも前途を見ぬいて、船員の注意をうながした。

坂谷のいったとおりだった。わが平靖号は、どんどんノーマ号の後に接近していった。

水夫の竹見は、さつきから船橋の入口に立っていたが、この場の緊張した空気におされて、無言のままだった。

「おや、竹見。なにか用か」

と、かえつて虎船長からとわれて、彼は、はつといきをのんで二三歩前に出た。

「ああ船長。私は、折角ですが、この船から下りたいのであります」

「なにイ……」

虎船長は、あつけにとられて、竹見の顔をあらためて見なおした。

信号旗

「なに、もう一度いつてみる」

船長は虎の名にふさわしく、眼を炯々けいけいとひからせて、水夫竹見をにらみつけた。

「はい。私は本船を下りたくあります」

「な、なにをいうか、本船にのりこむ前に、あれほど誓約したではないか。本船にのつたうえからは、本船と身命をともしして、目的に邁進すると。ははあお前は、南シナ海の蒼あおい海の色をみて、きゆうに臆病風おくびようかせに見まわれたんだな」

竹見は、目玉をくるくるうごかしつつ、

「臆病風なんて、そんなことは絶対にありません。私は……」

といつているとき、横から一等運転士の坂谷が

「船長。ノーマ号が、本船に『用談アリ、停船ヲ乞ウ』と信号旗をあげました。いかがいたしましょうか」

「なに、用談アリ、停船ヲ乞ウといつてきたか。どれ、向うはどういう様子か」

船長は、ノーマ号の様子をみるため、一旦双眼鏡を目にあてようとしたが、気がついて水夫竹見太郎八の方を向き、

「お前のはなしは、後でよく聞こう。それまでは下にいつてはたらいいろ。じつに厄やっか介いなやつだ」

と、はきだすようにいつた。

ノーマ号は、もうすこしで平靖号と並行しそうな位置まで近づいていた。そしてヤードにはたしかに用談アリ、停船ヲ乞ウの信号が出ていた。甲板を見わたすと、赤い髪に青い眼玉の船員や水夫が、にやにやうすわらいしながら、こつちを見おろしていた。

虎船長は、うむとうなつて、

「用談とは何の事だ。聞きかえしてやれ」

といった。

信号旗は、こっちのヤードにも、するするとあがった。

すると、すぐノーマ号から返事があつた。

“飲料水、野菜、果実ノ分譲ヲ乞ウ。高価ヲ以テ購ウ”^{あがな}

それを見て虎船長は、

「駄目だ。本船にも、その貯蔵がすくないから、頒^わけてやれない。香港^{ホンコン}か新嘉坡^{シンガポール}へいつて仕入れたらよかろうといつてやれ」

と、命令した。

その信号は、再び平靖号のヤードに、一^{いちれん}連の旗となつてひらひらとひるがえつた。

すると、また折かえして、ノーマ号からの返事があつた。

“ゼヒ分譲タノム。量ノ如何ヲ問ワズ、本船ニ^{かいけつびよう}壊血病多数発生シ、ソノ治療用ニアテ
ルタメナリ”

ノーマ号は、壊血病患者がたくさん発生しているから、ぜひ野菜や果実をわけてくれという信号なのである。

「壊血病とは、気の毒じゃ」と、虎船長はいつて、くびをふつた。

「じゃあ、すこしわけてやることにするか」

と、いつて、事務長の方をふりかえった。

「でも、本船の貯蔵量は、ほんとにぎりぎり間に合うだけしかないのですから、どうですか」

事務長は、分譲に反対の口ぶりだった。

「うむ、まあ海のうえでは、船のりと船のりとは相身互あいみたがいだ。すこしでいいから、なんとか融通してやったらどうじゃ」

虎船長は、若い日の船乗り生活の追憶からして、相身互いの説もちだした。

事務長は、だまつていると、傍にいた一等運転士の坂谷が、船長と事務長の間に入って、

「じゃあ、こうしてはどうですか。こつちからノーマ号へ出かけていつて、むこうのいうがごとくはたして壊血病患者がどんなに多数いるかどうかをたしかめたくうえで、野菜や果実をわたしてやったがいではありませんか」

坂谷は、なかなかうまいことをいつた。

「ああ、それならよかろう。事務長も、賛成じゃろう」

と虎船長は、事務長の同意を確かめたうえで、飲料水一斗、野菜二貫匁、林檎三十個を、ボートで持たせてやることにして、その指揮を事務長にやらせることにした。

「よろしい、行ってきます」

事務長は、気がるに立ち上った。

そのときであった。

「船長。私も、事務長と一緒に、ノーマ号へやってください」

船橋の入口に立っていた水夫竹見が、いきなり船長の前へとびだしてきた。

「ううつ、竹見か、お前は、行くことならんぞ。下船げせんしたいなどいい出すふらちなやつ

だ……」

「ちがいます。私が下船したいといったのは……」

「だまれ、竹見」と船長は、あかくなつてどなりつけた。

「わしは船長として貴様にめいずる。只今からのち貴様は本船内で一語も喋しゃべってはならん。

しかと命令したぞ。下へいつて、謹きんしん慎しておれ」

船長は竹見に対して、たいへん不機嫌をつのらせるばかりだった。

一体竹見は、なぜ下船したいなどと、とんでもないことをいいだしたものであろうか？

意外な人物

ノーマ号では、飲料水などを、平靖号が頒^わけてやってもいいという返事に、いろめきわ たった。だが、ノーマ号からボートを下そうといったのに対し、平靖号は、こつちが品物をボートに積んでそつちへいくといつて聞かないので、ちよつと当惑をしたらしく、しばらくは、その返事をよこさなかつた。

やがてのことに、やつと応^{おう}諾^{だく}の返事が、ノーマ号からあがつたので、いよいよ事務長はボートを仕立てて、六人の部下とともに海上に下りた。

事務長は、みずから舵^{かじ}をひいた。

飲料水と野菜と果実とは、舳にあつめられ、そのうえに大きなカンバスのぬのをかぶせてあつた。

虎船長は、本船をはなれていくボートをじつとみていたが、側をかえりみて、

「おい、一等運転士。あの荷は、ばかに大きいじゃないか。事務長は、もつていく分量を、

まちがえたんじやあるまいな」

「そうですね」と坂谷はくびをかしげて「まさか、事務長が、分量をまちがえることはありませんよ。事務長は、林檎一つさえ、ノーマ号へやりたがらなかつたんですからねえ」
「そういえば、そうだが、他人に呉れてやる物は、いやに大きくみえるのが人情なんだろうか」

船長は、ふしぎそうに、くびを左右へふつた。

そのうちに平靖号のボートは、停船しているノーマ号の舷側についた。縄梯子なわぼしこは、すでに水ぎわまで下されていた。

例のカンバスが、一度とりのぞかれたが、すぐ元のように、品物のうえに被せられた。ノーマ号の船員に、ちよつと見せただけのようであつた。

ボートからは、事務長を先頭に、三人の者が、縄梯子をするするとのぼつて、ノーマ号の甲板に上つた。

ノーマ号の、高級船員らしいのが五六人、そこへ集つてきて、なにか協議をはじめた様子である。きつと、壊血病患者がたくさん出たという先方のはなしをたしかめたうえでないと、品物を売りわたすことはできないといっているらしい。

「おやッ、あれはおかしいなあ」

とつぜん、船長が叫んだ。

「な、なんです。おかしいというのは……」

一等運転士が船長の顔をみた。

「あれみろ」と船長は、ボートの方をゆびさして「ノーマ号の上のぼった奴は三名、ボートには、五名のこつているじゃないか。合計して八名。どうもへんだ」

「ははア」

「ははアじゃないよ。君もぼんやりしとるじゃないか。いまボートにのって出懸けたのは、事務長と六名の漕手こぎてだから、みんなで七名だ。ところが今見ると、いつの間にやら八名になつている」

「ははア、するといつの間にかどつかで一名ふえたようすな。これはどうもふしぎだ」と、一等運転士は、口では愕おどろいているが、態度では、そんなに愕おどろいていない。彼はすでに、なにごとかをよきしていたようだ。

「ああッ、彼奴だ」と船長が大きなこえを出した。「竹見の奴、いつの間にか、本船をぬけだして、ノーマ号の甲板かんぱんに立っつていやがる。あいつ、どうも仕様がないやつだなあ」

「えつ、やつぱり竹見でしたか」

「うぬ、船長の命令を聞かないで、わが隊のとうせいをみだすやつは、もうゆるしておけない。かえつてきたら、おしいやつだが、ぶったぎってしまう」

虎船長はついに激怒してしまった。

その当人、竹見太郎八は、悠々とノーマ号の甲板をぶらぶらと歩いている。事務長が、ノーマ号の高級船員を相手に、強硬に主張をつつぽっているには、一向おかまいなしで、むこうの水夫をつかまえて、手真似ではなしをしている。

「どうだい。これは胡瓜きゅうりの缶詰だ。ほら、ここに胡瓜のえが描いてあるだろう。欲しけりや、お前たちに呉れてやらねえこともないぜ、あははは」

集つてきたノーマ号の水夫たちは、竹見の顔色をうかがいながら、ごくりと咽喉のどをならした。

「われわれは、その缶詰が欲しい。そのかわり、汝なんじはなにをほつするか」

と、むこうも手真似だ。

「そうだねえ——」

と、竹見はいつて、ポケットから煙草たばこを一本だして口にくわえ、ぱつと燐寸マッチをつけた。

すると、ノーマ号の船員たちは、一せいに呀あつときけんで、真青になった。
なぜ彼等は、青くなつたのであろうか。

煙草たばこをなぜ嫌う？

ノーマ号の船員の一人が、水夫竹見のそばへとびこんできたと思うと、いきなり手をのばして、竹見の口から、火のついた煙草をもぎとつた。

「あれツ、らんぼうするな。おれに、煙草をすわせないつもりか」

竹見は、ことばもはげしく、中国語でどなりつけた。そしてすばやくみがまえた。だが、彼の眼光は、どうしたわけか、てつのように冷たくすんで、相手の顔色をじつとうかがつていた。

「いのち知らずの、黄いろい猿め！ とんでもない野郎だ！」
そういつたのは、ノーマ号の船員だ。

彼は、竹見からもぎとつた火のついた煙草を、大口あいて、ぱくりと口こうちゆう中へ！ まるで、はなしにある煙草ずきの蛙のように。

「おや、この煙草どろぼうめ。おれには、煙草をすわせないで、ひったくって食べつちまうとは、呆あきれたやつだ」

水夫竹見が、一本うちこむ。

が、このときはやく、かるときおそく、かの碧眼へきがんの船員は、ぶつと煙草をはきだし、

「あ、あつい！」

と叫ぶ。そして甲板かんばんへぺたりと落ちた煙草を、足下に踏みにじった。もちろんこのとき、煙草の火はきえていたけれど、

「あははは、ざま見ろ。火のついた煙草を喰って、やけどをしたんだろう。ふふふ、いい気味だ」

竹見は、へらず口をたたいて大いに、わらった。

だが相手の船員たちは、真剣なかおで同僚の足元に視線をあつめる。そして煙草に、火のついていないのをたしかめると、ほっとした面持おももちになった。言葉を発する者さええない。竹見は、いじわるくにやりとわらつて、ポケットに手を入れた。そしてまた新たに一本

の煙草をとりだして、唇の間へ、ひよいとくわえた。

おどろいたのは、ノーマ号の船員たちだ。わつとわめいて、一せいに水夫の竹見におどりかかった。竹見は、

「な、なにをするツ！」

と、どなったが、もちろん多勢たせいに無勢ぶせいで、とてもかなわないと見えたし、そのうえ、じつはこのとき竹見にもいささか考えがあつて、わざと相手のやりほうだいにまかせておいたのだった。

すると相手は、ますますいい気になつて、竹見のポケットに手をさし入れた。なにをするかとみていると、煙草の入った箱とマツチとを、だつりやくした。そして、その二つの品物を、こわごわ舷げん側そくから海中へ、ぽーんとすてたものだ。

それでもまだ心配だとみえて、舷側からわざわざ海面をみて、この二つの品物がたしかに水びたしになつているのを確かめている者もあつた。なぜそんなに煙草とマツチが、きらいなのであろうか。

このとき、竹見がさげんだ。

「ちえつ、おれをあまく見て、よくもまあ大勢でもって手ごめにしやがったな、それじゃ

こつちも、胡瓜の缶詰をかえしてもらおうよ」

どうせ相手にはわからないであろうところの中国語でしゃべって、さつき竹見が船員中のおとなしそうな一人にくれてやった胡瓜の缶詰を、すばやくうばいかえした。

報復手段なのである。どつちもまけてはいない。

「あつ、それはおれが貰った缶詰じゃないか」

その船員は、びつくりして竹見にとびかかってきたが、彼は相手にならないで、ひらりとからだをかわした。このことは、その相手の船員ばかりでなく、附近に立ち並んでいた彼の同僚に少からぬ失望をあたえたようである。そうでもあろう、そういう野菜もの^{すそわ}にうえていた彼等は、あたらきゆうりのお裾分けを失ってしまったのだから。

船員たちは、たがいに顔を見合わせて、なにか早口にどなり合っていたが、やがて一同は、やっぱり胡瓜の缶詰にみれんがあると見え、竹見の傍へよってきて、ぐるっと取まいた。

「こら、その缶詰を、こつちへかえせ」

「さつきおれたちがもらった缶詰だ。こつちへよこせ」

竹見から煙草とマッチをうばいとつたことなどは知らんかおで、多勢を頼んで水夫竹見

に肉薄してくるそのずうずうしきには、あきれるよりほかない。

竹見は、べつにおどろきもしない。ふふんと鼻のさきでわらうと、とびかかってくる奴の腕を、かるくふりはらつて、ぐんぐん前へ出ていく大胆さ。そこで彼は、さつきからこの有象無象うぎやうむぎやうとは別行動をとり、ウインチにもたれて、こつちをじろじろしていた一人の、たくましい水夫の前にちかづき、

「おい、お前にこれをやるよ」

と、もんだいの缶詰をさしだした。

すると相手は、にやりと笑つて、竹見のさしだす缶詰をうけとつた。

巨人ハルク

「やい、ハルク、その缶詰は、おれたちのものだ。こつちへよこせ」

ハルクというのは、その逞たくましい巨人水夫の名のようだ。缶詰にみれんたつぷりの船員た

ちはハルクの前へおしかけて、うばいかえそうとする。

「……」

巨人ハルクは、一語も発しないで、近づいてくる船員のかおをじろりじろりとながめまわす。そして缶詰をわざと顔の前でひねくりまわして、ごくりと唾をのんでみせたりする。こいつはかえって気味がわるい。

いきおいこんだ船員たちは、猫ににらまれたねずみのように、もう一步も前に出られなくなつた。

「やい、ハルク。意地わるをすると、あとで後悔しなければならぬぞ」

ハルクは、どこを風がふくかといったかおであつた。

竹見は、ハルクが、ばかに気に入つた。彼はそこでハルクの前へいって、右手をさしのばした。

「ハルクよ。お前は世界一の巨人だぞ！」

「ふふん、それほどでもないよ」

ハルクがはじめて口をきいた、しかも片言ながら、とにかく広東語カントンで……。そして二人は、しっかりと握手をしてしまったのである。そこで、さしものめんどろな胡瓜の缶詰事

件も、一まず、かたづいた。

こつちで缶詰事件が起つている間に、平靖号から野菜その他をもってノーマ号へ出掛けた事務長の一行は、とどこおりなく取引をすませた。ノーマ号の船長ノルマンは、金貨でその代金をはらつたが、その支払いぶりは、なかなかよかつた。よほど金がある船であるのか、それともよほど野菜類にこまつていたものらしい。

「貴船は、これからどこへいかれるのですか」

平靖号の事務長は、中国人らしい発音で、ノルマンにたずねた。

「本船は、サイゴンへへて、シンガポールに出るつもりだよ」

ノルマン船長は、たいへんおちついた紳士のように見えた。おそろしくやせぎすで、大きな両眼は、日よけの色眼鏡によつて遮しやへい蔽されてあつた。

「貴船は貨物船らしいが、なにをつんでおられるのですか」

「鉱石である」

鉱石である——という返事が、ばかにはやくとびだした。まるでさつきからこれをきかれることを予想して、すぐ出せるように用意しておいた返事のように聞えた。

「鉱石というと、どんな種類の鉱石ですか」

ノルマン船長のくちびるが、ぎゅツとまがった。

「もう用事はすんだのだ。いそいで帰りましたまえ」

ノルマン船長は、はじめて叱咤しつたするようにさげんだ。彼の語尾は、かすかにふるえおびていた。

事務長の質問が、ノルマンの気にさわつたらしい。

「ねえ、事務長」

そのとき、事務長のうしろからこえをかけた者がある。それは一緒にノーマ号へのりつけた一行の中の一名、丸本という水夫だった。

「なんだ」

「本船からの信号でさあ。はやくかえってこいといってますぜ」

事務長は、うむとくびをふって、

「ああ、いますぐかえると、手旗信号で返事をしてくれ」

「ねえ、事務長」

「なんだ。まだなにかあるのか」

「へえ、もう一つ、厄やっかい介なことをいってきました。虎船長から、じきじきの命令でさあ」

「といって、常日ごろ、ばかに年寄りじみたことをいうので、お爺じいと綽名あだなのある丸本水夫だが、すこし当惑とうわくの色が見える。

「なんだ、やつかいなことというのは」

「ほら、あの竹たけのことでさあ。さつきわれわれ一行の中に紛れまぎこんでいましたね。彼奴はカンバスの下に野菜と一緒にたかくれていたんですよ。ところが虎船長、大の御立ごりつぶ腹くですわい。いまも船からの信号で、竹の手足をしばってつれもどれとの巖命げんめいですぜ。ようがすか」

「ふむ、そうか。竹見……いや竹の手足をしばってつれもどれと、船長の命令か。無理もない、船長の許可なくして船をぬけだすことは、一番の重罪だからな」

「じゃあ、やりますかね」

「なにを？」

「なにをつて、竹の手足を縛しばつてつれてかえるかということですよ」

「もちろんだ。なぜそんなことをきくのか」

「だって、彼奴は大力があるうえに、猿のように、はしっこいのですからね。こっちがつかまえると感づくと、この船内をはしりまわって、なかなかつかまえられませぬぜ」

「ふーん、それはお前のいうとおりだな」

と、事務長はうらめしそうなおになつて、本船の方をふりかえつた。本船の甲板では、虎船長が、椅子のうえにどつかとすわつて、こつちをにらんでいた。

投げナイフ^な

「おい、こまつたな。お前一つ、骨をおつてくれないか」

「えっ」

「お前は竹と仲よしなんだろう。だからお前がむかえば、竹は反抗しないでつかまるだろう」

「ごめんこうむりましょう。そんなことをすれば、わしや、ねざめがわるいや。とらえられりや、どうせ竹の野郎は、死刑にならないまでも、船底に重禁錮^{しゅうきんこ}七日間ぐらいはたしかでしよう」

丸本は、なかなか承知をしない。

事務長も、これにはかえす言葉もなかったが、さりとしてこんなところにぐずぐずしているわけにもいかない。

「竹の刑罰のことは、おれが保証して、かるくしてやるから、お前まえ一つつかまえろ」

「困ったなあ。重禁錮にしない約束、くい物と酒はたっぷり竹にやってくれる約束、それなら引受けませぬ。わしや計けいりやく略をもつて、竹のやつを縛つちまいますなあ」

「かうものはくい、のむものはのむ囚人なんて聞いたことがないが……仕方がない、おれが虎船長にとりなすから、はやくお前はかかってくれ。おれたちはこっちで、おとなしく控ひかえている、しかし加勢をしると合図あひざをすれば、すぐとびかかるから」

「ようがす。じゃあ、いまの約束は、男と男との約束ですぜ。まぢがいなしですぜ」

「うん、くどくいわなくてもいい。まぢがいなしだ」

ノルマン船長を前にして、二人は気がねをしながらも、早口の相談一決！

そこで丸本は、ノーマ号のともの方へ、のこのことにかけていった。それと入れかえに、事務長は、部下を彼のかたわらへよびよせて、いつでも丸本に加勢のできるように用意をした。

丸本は、どんな計略をもっているのであろうか。彼の歩いていく後から見ると、いつの間にか麻紐あさひもで輪をこしらえて、かくし持っている。

「おい竹……おい、竹」

丸本に呼ばれて、竹見は知らぬが仏で、安心しきってノーマ号の船員の間をかきわけ、前へ出てくる。

「おい竹よ。いま事務長さんから特別手当が出た。ほら、わたすよ。手を出せ」

「なんだ。特別手当だって、いくらくれるのか知らないが、はて、あの事務長め、いつからこんなに気がきくようになったか」

と、ひよいと手を出すところを、丸本がまっついていましたとばかり、麻紐の輪をかけてしまった。

「あつ、おれをどうするのか」

「わるくおもうな、おとなしくしろい。お前を縛ってつれもどれと、虎船長の命令だ」

竹見は、しばらく目をぱちぱちしていたが、

「いやだい。あんな船へ、だれがかえるものか。お前、おれを売ったな」

「売ったなどと、人聞きのわるいことをいうな。これもお前のためだ。わしは飯めしも酒も…

…」

「いうな、うら切りお爺め！ お前なんぞにふんづかまっつてたまるかい」

といつてはねのけようとする。そのときばたばたかかてきたのは、待機中の事務長をはじめ派遣隊の連中だった。この連中にそうがかりになつては、大力の竹見といえどもどうにもならない。

「おい、ハルク、だまつてみていないで、おれをたすけてくれ。おれが捕つて本船へつれもどられると、死刑になつちまうんだ」

それを聞くと、ハルクはウインチの下からのつそり前に出てきた。彼は、太い筋の入つた両腕を、ゆみのようにはつて、竹見の加勢をすると見せた。

「よせよせ、ハルク」

他の船員たちが忠告した。しかしハルクは缶詰をもらったおれいの方だけ、力を出すつもりであつた。

平靖号の船員対ハルクの乱闘のまくは、今にもノーマ号の甲板の上に切つておとされそうになつた。

そのとき竹見は、ハルクの後へ退つていたが、睨み合いの相手丸本をいつになくきたな

い言葉でののしり、

「やい、うら切り者よ。これが受けられるなら受けてみろ」

というなり、竹見の掌てのひらからびゅーんといきおいよく、一挺のナイフが丸本の方へとんでいった。竹見のなげナイフ。丸本のとめナイフ——といえは、平靖号の名物の一つだ。どつちも神技というべきわざをもっている。だが今は曲まが技ぎくらべではない。丸本は、竹見が自分に殺意を持つていると見て、大立腹だいらつぷくだ。びゅーととんでくるナイフを、びたりと片手でうけとめ、ただちに竹見の心臓をねらつてなげかえそうとしたが、そのとき妙な手て触りざわを感じた。見ると、ナイフの柄えに、シャツをひきちぎったような布ぎれがむすんであった。

「おや！」

と叫んだ、丸本はその布ぎれに、なにか字が書いてあるのに気がついた。

火薬船

丸本は、はっとおもった。

どうも、さつきから、竹見のそぶりという奴が、一向腑におちない。あれほどの仲良しの竹見から、ナイフを、なげつけられようなどはまったく想像もしなかったのである。でも、とんでくるナイフは、ぜひ受けとめねばいのちにかかわる。そこで、こっちも手練の早業で、やつとナイフを受けとめてみると、そのナイフの柄に、布ぎれがついていたのであった。それにはおどろいた。

いや、愕きは、そればかりではない。その布ぎれには文字がしたためてあった。彼は、すばやくその文字を拾いよみした。

「火ヤク船ダ。オレハノコルヨ」

彼は、たてつづけに二三度、それをよみかえした。しかし、そのいみを諒解するに、まだその上、五六度もよみかえさねばならなかつた。そして、その真意がわかつたとき、丸木のからだは、昂奮でぶるぶるふるえだした。

「うむ、火薬船だ、俺は残るよ」そうか、このノーマ号は火薬をつんだ船なのか、それで、竹見のやつが、この船にのこるといふのか」

丸本は、ちらと、竹見の方に、すばやい眼をはしらせた。

“どうだナイフにつけてやった手紙の文句のいみが分るか”
と、いいかげな竹見の目附であつた。

「竹見の奴、このノーマ号が火薬船だから残るといふが、火薬船なら、なぜ残らなければならぬのか」

こいつは、ちよつとばかり謎がむずかしい。丸本には、竹見の意中が、どうもよく分らなかつた。が、それが分らないといつて、ぐずぐずしていらぬこの場であつた。

そのとき、丸本のかたをたいたものがある。それは事務長だつた。

「おい、丸よ。なにをぐずぐずしているんだ。はやく、その麻紐あさひもを、手元へ引ひっばれ」

そうだ、麻紐の一端が、脱船水夫の竹見の片手を、しっかりと捉えているのだ。竹見はこの船に居残るといふ。しからば、この紐をはなしてやらなければなるまい。といつて、この場合、下手なはなしようをすれば、ノーマ号の船員どもにさとられるから、竹見の後のためによりしくあるまい。日ごろ、和尚おしよさんのおちついてゐる丸本水夫も、こうなつては、煙突のうえで、きゆうに目かくしされたように、狼狽ろうばいしないではいらぬ。でも、ぐずぐずしてはいらぬなかつた。すすむにしろ、しりぞくにしろ、ここで一秒た

りともためらっていることはゆるされないのだ。彼は、ついに決心した。

「こらッ、竹の野郎！　もう誰がなんといつても、おれがゆるしちやおかないぞ。手前の生命は、おれがもらった！」

すさまじく憤怒の色をあらわし、なかなか芝居に骨がおれる丸本は、竹見の手首を縛った麻紐を、ぐつと手元へ二度三度手繰った。

すると竹見の身体は、とんとんと前へとびだして、つんのめりそうになった。

「うん、野郎！」

ハルクが、たくましい腕をのばして、横合から麻紐をぐつと引いた。

とたんに、麻紐が、ぷつんと切れた。

「あつ」

「うーむ」

丸本も竹見も、前と後のちがいはあるが、ともにどつと尻餅をついて、ひっくりかえった。巨人ハルクさえが、あやうく足をさらわれそうになった。――麻紐は、なぜ切れたのか。それは丸本の早業だった。手ぐるとみせて、彼は手にしでいたナイフで、麻紐をぷつんと切断したのであった。

巨人ハルクは、ゴリラの如く、いかった。

「な、生意気な！ もう勘弁がならないぞ！」

と、大木のような両腕をまくりあげて、じりじりと前へ出てくる。

これを見て、おどろいたのは、丸本よりも平靖号の事務長だった。いや、事務長ばかりでない。その後につきしたがう平靖号の乗組員たちであった。いよいよこれは、ものすごい乱闘になるぞ、そうになると、最早^{もはや}生きて本船へかえれないかもしれないと、顔色がかわった。

丸本も、立ち上って、今はこれまでと、みがまえた。

巨人ハルク、その後には水夫竹見、そのまた後に、ノーマ号のあらゆる船員どもがずらりと、一くせ二くせもある赤^{あかづら}面が並んで、前へおしだしてくる。ノーマ号の甲板^{かんばん}上に、今や乱闘の幕は切っておとされようとしている。

甲板のうえは、たちまち鼻血で真赤に染まろうとしている。こうなっては、どっちも引くに引かれぬ男の意地、さてもものすごい光景とはなった。

俺は若い！

「みんな、停めろッ！」

とつぜん、晴天の雷鳴のように、どなつた者がある。

船長だ。ノーマ号の船長、ノルマンだ。いつの間にか、船長ノルマンは、双方の間へとびだしていた。

「おお」

「うむ、いけねえ」

双方とも、ぎくりとして、にぎりこぶしのやり場に当惑した。

「こらッ、喧嘩したいやつは、こうして呉れるぞ」

ノルマン船長の足が、つつと前に出たかと思うと、彼の両腕が、さつとうごいた。と思うとたんに、彼の両腕には、すぐ傍にいた平靖号の水夫一名と、ノーマ号の水夫一名とが、同じく襟がみをとられて、猫の子のように、ばたばたはじめた。このほそっこい船長には、見かけによらない力があつた。そのまま船長は、つつつと甲板をはしって、

「えいッ。」

というど、二人の水夫を、舷からつきおとした。おそるべき力だ。船長は、或る術を心得ているのかもしれない。

どどーンと、大きな水音すいおんがした。

「どうだ。後の奴も、海水の塩しお辛いところを嘗なめて来たいか。希望者は、すぐ申出ろ」と、威風堂々と、あたりを見まわしたが、そのいきおいはげしいことといったら、見かけによらぬノルマン船長の怪力を知らない者は、窒息ちっそくしそうになつたくらいである。

「おい、みんな。帰船だ」

事務長は、そういつて、ノルマン船長に、型ばかりの挙手の礼をおくると、自分はいそいで、舷側に吊つた繩梯子なわぼしこの方へ歩いていつて、足をかけた。

丸本が、その後につづいた。

そうして、一同は、大急ぎで繩梯子をおりて、ボートにうちのつた。

「漕こげ！」

事務長は、舵かじをひきながら、命令した。

「竹見の奴は、あのままでいいのですか」

と、一人の水夫が聞いた。

「うむ——」

と、事務長は、答えにつまった。

「仕方がないじゃないか。それとも、お前に智恵でもあるか」

これは丸本の言葉だった。

水夫は、だまつてしまった。

ボートは、だんだんとノーマ号からはなれていく。事務長は、舵をとりながら、ノーマ号の船上に、脱走水夫竹見のすがたをもとめたが、どこにいるのか、さっぱり分らなかつた。ただそこには、ノーマ号の水夫たちが、おもいおもいに、こつちを馬鹿にしきつたかおで、見おかつていた。

まつたくのところ、馬鹿にされたようなこのボート派遣であった。

さて竹見は、一体どうしたのであろうか。彼は、前から退船の意志をもっていた。その理由は、虎船長に具申ぐしんしたたびに、後にしろとかたづけられてしまったが、彼の真意は、駆逐艦松風の臨検隊員をむかえて、ああ自分も志願して、天晴れ水兵さんになって、軍艦に乘組み、正規の御奉公したいと、急にそういう気にかわつたのである。すると、中国船

平靖号の一員として、そのままいることが厭いやになった。そこへ虎船長には、こつぴどくおこられる。どうにでもしろと、こつちも中ちゅう腹ばらになっているところへ、ボートがノーマ号に出かけることになったが、こいつがまた虎船長から、はつきり停とめられてしまったので、どうせ怒ついでられ序ついでだとおもつて、脱船をしてしまったのである。

そういうことはよくない事だった。船長の命令をまもらないのは、わるいことだと、竹見は百も二百も承知していた。しかしながら、彼はわかかった。海へ出て来たのは、生命いのちをまともに、おもいきり冒険をするためだった。若い者は、なんでもはやいところむさぼり食くいたい。冒険味だつてそうだ。平靖号乗組員として参加したのもそうなら、水兵さんになりたいたいとおもつたのもそうである。三転して、ノーマ号へいって、外人のかおを見ないではいられない衝動にかられたのも、やつぱりそれだった。若い者は、気もみじかい。ことに竹見にいたつては、非常に気もみじかい。

気もみじかいことは、一めんから見れば、たいへんよろしくない。しかし他の一めんから見れば、それほど心が目的物にむかつてもえている証拠であつて、若い者なればこその特長である。

気もみじかいという性質を、悪いところへ用いてはよくない。我わがまま儘ままと混同せられるか

らである。しかし、気がみじかいという性質を、良いところへ用いれば、ずいぶんいい仕事が出来る。今の世に、仕事をしない人間は、無駄であり、邪魔でさえある。気みじかを善用して、どんどん仕事をはこんでいい若い者は、大いにほめてやっていい。そういう気みじかい若者が、少ければ、国家は亡びるのじゃないかと思う。

とにかく、竹見は、気がみじかく、冒険を慕ってどんどんうごいているうちに、秘密の火薬船ノーマ号のうえに、ただ一人取りのこされてしまったというわけである。

〃死に神〃 船長

ノーマ号を火薬船だと、観察した竹見の眼力は、なかなかえらいものだった。

煙草を甲板で吸うと、船員たちが顔色をかえた。——たったそれだけのことで、竹見は万事をさとしたのである。

(火薬船とは、こいつは有難い！)

竹見は、思いがけない宝の山をほりあてたように思った。これなら、彼のあこがれている冒険味百パーセントの世界だ。彼は、当分この船で、スリルを満喫まんきつしたいとかんがえた。

それだけではない、竹見をしてこのノーマ号に停まらせた理由があつた。

それは外でもない。この切迫した世界情勢の下において、香港ホンコンの南方を、変な国籍の船が火薬を満載して、うろろうしているなんて、どうもただ事ではないとおもつたからである。

（ふむ、この火薬船が、どこでなにをやるつもりなのか、これは日本人としてうっかりしていられないぞ！）

そうおもつた彼は、得えたりや応おうと、ノーマ号でがんばることに決めてしまったのである。ノーマ号が、これからなにをするか、それを監視してやろう。これはきつとおもしろいことになるぞと、ほくそ笑えんだのである。

巨人ハルクを、いちはやく味方につけたことは、竹見のはやわぎであつた。竹見は、ハルクさえ味方につけておけば、あとはこの船に停とどまることなんて、わけはないものとかんがえていた。なにしろ、中国人水夫はよく働くことは、世界中に知れていることであるから、

ハルクの口ぞえで、簡単に船長ノルマンにとりなしてもらえるものと決めていた。

ところが、事實は、そうかんたんには、いかなかったのである。『死に神』という^{あだな}綽名のあるこの秘密の火薬船の船長ノルマンだった。これが一通りや二通りでいくような、そんな他愛のない船長とは、船長がちがうのであった。

「おい、ちよつと、ここへ出てこい！」

船長ノルマンは、船橋のうえから、甲板へこえかけた。これもちよつとした中国語をつかう。

「へえ、——」

竹見は、わざと頭腦のにぶそうな声で、返事をした。

「へえじゃないぞ。いそいで、ここへ上つてこい」

船長の語気は、一語ごとにあらくなつていく。

(船長め、どうしたのかナ)

竹見は、白刃^{はくじん}で頸^{くび}すじをなでられたような気味のわるさを感じた。

「へえ、ただ今」

とこたえて、竹見は、ハルクに、ちくりと^{めくば}目配せした。

ハルクは、無言のままあごをしゃくつた。

(船長のいうとおり、船せんきょう橋へのぼれ)

といっているのである。

竹見は、にやツとわらつて、いそぎ足で、昇降段しょうこうだんをのぼつた。

下から、ほツほツという嘆声たんせいが聞えた。竹見がましろのように身軽にのぼっていったのを、水夫どもが感心しているらしい。

「へえ、なにか御用ですか」

と、竹見はぬつとかおを前につきだした。

船長ノルマンは両腕をくんで、けわしい目つきで、竹見をじつとにらみつけた。

「貴様は、なぜ本船へかえらないのか」

するどい船長の質問だ。

「へえ、私はもう、あの船へかえりたくないんです」

「なぜ。なぜか、そのわけをいえ」

「かえれば、死刑になりますからね」

「なぜ死刑になる？」

「へえ、それは——」といったが、竹見はちよつとどきまぎした。

「それはその、仲間をちよいとやつて、監禁されていたんでがすよ。死刑になる日まで、どこに待つやつがあるもんですか。丁度いい塩梅あんばいに、ボートがこつちへ出るということを聞いたもんで、それにもぐりこみやした」

竹見は、口から出まかせを、べらべらしゃべりながら、よくまあこうもうまいことしゃべれるものだと、自分ながら感心した。

船長ノルマンは、苦にむしが虫をかみつぶしたようなかおをして、聞いていた。そして竹見の言葉がおわつても、そのまま無言で、竹見をにらみつけていた。

あまりいい気持のものではない。

二三分たつた後のこと、ノルマンは、熱が出た病人のようからだをぶるぶるとふるわせると、はきだすようにいった。

「うそをつけ、小僧。貴様は日本人じゃないか！」

てごわ
手剛いノルマン

水夫竹見は、肚はらのなかで、あつときけんだ。

“うそをつけ、小僧、貴様は、日本人じやないか！”

と、船長ノルマンから、だしぬけにいかつをくらわせられたのである。全く不意打ふいうちをくらったので、びつくりした。だが、竹見は、こういうときのしぶとさについては、人後におちない自信があつた。

(ふん、なにをぬかすか)

と、口の中でいつていた。

「どうだ。ちやんと、当つたろう。当つたら、すなおに、日本人ですと白はくじょう状しろ」

船長ノルマンは、威丈いたけだか高たかになつて、竹見をきめつけた。

「日本人だつたら、大人たいじんは、なにか、わしに呉れるんですかい」

「よくばるな。貴様に何一つ、呉れてやる理由があるか」

「なあんだ。それじや、日本人であつてもなくても、同じことだ。つまらねえ」

と、いいすてて、竹見は、船長にくるりとしりをむけて、むこうへいこうとする。

「さて、小僧、まだ話はすんじやいないなのだ」

船長ノルマンは、ふたたびなりつけた。

「やれやれ、まだ話が、のこっているのですかい」

竹見は、わざとつまらなさそうな顔をして、もどってきた。

「貴様は、相当ずうずう図々しいやつだ。一たい、誰のゆるしを得て、このノーマ号のうえを歩いているのか」

「わしの気に入ったからですよ」

「なにッ」

「おどろくことはありませんや。船長さん、あなただつて、この船が気に入ってればこそ、こうしてノーマ号にのつて、船長とかなんとかを引きうけているのでしよう」

竹見は、おそれ気げもなく、いいはなした。

「ふふん」

さすがに、船長ノルマンは、おちついたものである。はらを立てないで、鼻さきでちよつとわらったばかりだ。

「とにかく、貴様みたいなわけのわからない小僧には、貴重な本船の食糧を食べさせてお

くわけにはいかん、日本人ならともかくもだが、中国人などに、用はない」

「……」

「用はないから、貴様をかたづけややる。わが輩の腕力が、いかに物をいうかについては、貴様もさつき舷ふなばたをとびこえて二匹の濡ぬれねこが出来あがったことを知らないわけじゃあるまいね。どうだ」

船長ノルマンは、さつき二人の水夫を、舷ごえに、海中へなげこんだことをいつているのであろう。

「よわい者を、おどかしつこ無しだ」

「なにを、ぐずぐずいうか」

船長ノルマンは猿臂えんぴをのぼして、水夫竹見の襟えりがみ髪をぐつつかんだ。怪力だ。竹見はそのままひつさげられた。足をばたばたしたが、足の先に、どうしても甲かん板ばんがさわらないのであった。それでは、どうすることもできない。

「さあ、どうだ。このまま舷へもつていつて、ぽいとすててやろうか」

「なぜすてるのか」

「わかっているじゃないか。この船に、中国人なんか、用はないんだ。それとも、まっす

ぐに日本人だと、白状するか」

ノルマンは、どこまでも、竹見に白状させるつもりだ。

「船長さん、さつきから、何度もいつているじやありませんか。わしは日本人が大きらいなんですよ。それにも拘かかわらず、あなたという人は、なんでもかでも、わしを日本人にしてしまわないと承知ができないらしい。それは無理ですよ。いや無理などころか、無茶ですよ」

竹見は、どこまでも、中国人でがんばる決心だった。

「まだ、白しらばくれて、そんなことをいうか……」

と、船長ノルマンは、憎にく々しげにいいはなつて、竹見の襟髪をもつたまま、猫ねこの仔こでもあつかうようにふりまわした。

竹見は、もうなにもいわなくなつた。ていこうもしない。そして怪力船長の腕が、もうそろそろくたびれて、自分を下におろすだろうとまちかまえていた。が、船長ノルマンの腕は、なかなかしつかりしている。

「よよし、貴様は、日本人でないことが、よくわかつたぞ」

「えっ、中国人だということがわかりましたか」

「うふん。たしかに貴様は中国人であるということにしておけ。しかしよく見ているがい、今に吠えつらをかかないがいいぞ。そのときは、なにをいってもおそいんだぞ。それまでは、この船で貴様を、やとつておいてやる」

そういつて船長ノルマンは、ふりかえつて、いみありげに、はるか後方の海面に目をや
つた。

そこには、船足のおそい平靖号の船影は、もうかなり小さくなって、おくられているのが
見えた。

ノルマンは、胸の中になにをかんがえているのであろうか。

虎船長の決心

こつちは、平靖号の船上。

虎船長は、不自由な身体を、船長室の籐椅子のうえにおいて、ぶんぶん怒っている。

その前には、ノーマ号へ派遣され、野菜などを金貨にかえてきた事務長をはじめ、一行の若者たちが、かしこまっている。

「火薬船だというが、はたして本当かどうか、なぜもつとはつきりしらべてこなかったんだ。竹見の奴が、脱船だっせんしたい一心で、火薬船などと手前てまえをつくろう手もないではないからかう」

事務長は、髭面には似合わず、少女のようににはじらいながら、

「どうもソノ、あの場合ぐずぐずしていると、こっちの部下たちが、みんな海の中に、なげこまれそうになったもんでしてナ。なにしろ多勢たせいに無勢ぶせいというやつです。そのうえ、向こうは、なかなか手剛ていわいごろつきぞろいなんです」

と、弁解に、これとつめているが、虎船長には、はら立だたしくひびくばかりだった。

「もし火薬船というのが本当のことなら、ノーマ号へのこるといった竹見の奴は、さすがにわしの部下らしく見上げた者じゃ。じゃが、あの男は、どうもたちがわるいから、俄に信用はできない」

「ええ船長、竹見のいつていることは、本当です。間違いはありません。私は太鼓判を捺おしますよ」

そういつたのは、竹見の相棒あいぼうの水夫丸本だった。彼は、竹見から、密書のついたナイフをなげつけられ、それをうまくうけとつた男だ。

虎船長の眼が、ぎよろりと光る。

そのとき、入口の扉をノックして、入ってきたのは一等運転士の坂谷だった。

「船長。どう決心がつかれましたか」

「ああ、わが艦隊へ無電を打つことか」

じつは、ノーマ号が火薬船だという報告があつたとき、坂谷は、この事実をすぐさま、艦隊へ報告しておくのがいいと進言したのだった。しかし虎船長は、なるべく無電を打ちたくない主義だった。なにしろ中国船のつもりであるから、あまりスパイ船のようにはきはきした行動をとりたくないこともあつたし、とかく無電という奴は、四方八方ひろがるので、ぬすみ聞きされる。その結果、平靖号があやしまれて、今後の行動が、制限せられるようだとこまるとおもつたのである。

「ねえ、一等運転士」

と、虎船長は、深刻な表情をして、

「やはり、艦隊へ無電をうつことは、当分見合わせよう」

「そうですか。見合わせますか」

もと、海軍の下士官だった坂谷は、ちよつと不満のようである。

「その代り、じゃ。わが平靖号は、これから極力、ノーマ号の後をつけていくことにしよう。そして、ノーマ号がなにをはじめめるかを十分監視して、確実にあやしい事実をつきとめたら、そのときは、こっちは、平靖号を犠牲にしても、艦隊へ報告する。そういうことにしては、どうか」

虎船長は、さすがに船長らしく、どこまでも慎重にやろうというかんがえだった。慎重にやって、いよいよその場にのぞめば、大犠牲をはらう決心もしているというわけだった。「ああ、そんなら、結構でしょう。一つ石炭をうんとたいて、ノーマを追いかけましょう」坂谷も、ついに同意した。水夫丸本が、につこりわらった。相棒の竹見と、いよいよ永のお別れかと、かなしんでいたのに、ここへ来て、きゆうに、彼ののりこんでいるノーマ号を追いかけることになった。竹見に会う機会も、必ず出来るであろうと、丸本の胸は、にわかにおどりだした。

「おい、坂谷一等運転士。今のノーマ号の針路は、どっちへ向いているのかね」

虎船長が、質問した。

「はい、さつき南西へ針路をてんじました」

「ほう、南西へ。どこへいく気かな」

「その見当では、近くに海南島がありますが、まさか海南島へは、いかないでしょう。結局、仏領インドシナのハノイか、それとも、ずっと南に下りて、サイゴンへ入るか、そのどっちかでしょうと思います。」

「ふむ、どっちにしても、相当の長い航程だ。ノーマ号を見うしなつちや、おしまいだから、ひとつ石炭をどんどんたいて、やつにくつついて、はなれないように船をやれ」

虎船長は、そこではじめて、にやりと笑顔を見せた。

謎の人物

そのころ、南シナ海を中心とする界隈かいわいの各国官辺かみすじで、ポーニンと名のる白人のことが、しきりに問題になっていた。

ポーニン氏は、トマトのようにかおの赤い、そして桃のような白い毛が密生した、小柄の白人であった。彼は、白系ロシア人であると自ら称していたが、だれも一ぺんでそのようなことを信じる者はなかった。

このポーニン氏は、身体の小柄になあわず、ひどく心臓のつよい人物で、相当の金をもっているようにいつていたが、ときには宿屋の払いにもさしつかえることなどもあつて、まことに複雑怪奇な人物というべき人物だった。

彼は、なにか仕事でもさがしているらしく、しきりに南シナ海を中心に、あっちへいたり、こっちへ来たりしていた。

さて、この物語は、彼ポーニンが、インドシナの南方の海岸サイゴン港にやってきてからのちに始まる。

サイゴンといえば、ちかごろは、わが欧州航路の汽船でかならずよつていくという重要な貿易港であつて、米、チーク材、棉花などを輸出し、パリ―風の賑にぎやかかな町で、フランスの東洋艦隊の根拠地でもある。

フランスの守備軍司令部に属する警備庁の、奥まった一室では、長官アンドレ大佐以下の首脳部があつまつて、しきりに会議の最中である。

「おい。たしかに、ポーニンにちがいないんだね。容貌ようぼうや、身長なども、よくしらべてみたかね」

と、大兵肥満のアンドレ大佐が、係の警部モロにいった。

「長官閣下、そのへんは、念入りによくしらべあげてあります。容貌や身長だけでなく、指紋までもしらべました。全く、例のポーニンにちがいません」

「じゃあ、ただ一つちがつているのは、名前だけなんだね」

「そうです。フランス氏と名乗っていますが、もちろんこれは変名です。フランス氏などという名前は、フランスにだって、そう沢山ある名前じゃありませんからね」

「よし、わかった。では、謎の人物ポーニンに相違ないものとして、話をすすめよう」

と、長官アンドレ大佐は、大きく肯うなずいて、

「そこでじゃ。ポーニンが、しきりにセメントを買いあつめているというが、それは本当か」

「本当ですとも。まだ口約束だけのことですが、私の部下のしらべてきたところによると、こんなに有ります。このとおり、全部あつめるとたいへんな量です」

警部モロは、鞆の中から、いろいろな形の紙を重ねあわせた書類束をとりだした。

「ええと、これが五百袋。こっちの商會が、千二百袋。またこっちは、三百袋。……」

「合計して、どのくらいになるのか」

「ざっと勘定しまして、九百トンです」

「ふーン、九百トンのセメントか。相当の分量だ。そんなセメントを買いこんで、どうする気かな」

「当人は、今にセメントが値上りするから、買いしめておくのだ、といっているそうです」
 「すると、値上がりのところで、売つてもうけるつもりなんだな。すると、単に、目さきの敏い商人でしかないではないか」

長官アンドレ大佐は、そういつて、卓子テーブルにあつまっている首脳部の人たちのかおを、
 ずーと見まわした。

「それは、どうもおかしいですな」

「ポーニンが、金儲けもくだけに、うき身をやつしているとは思われませんねえ。イギリス大使からの内報をよんでも、単に、それだけの人物とはおもえない」

席上では、誰も、ポーニンが、今目さきの敏い商売だけをやっているものとは信じない。
 「おい、モロ警部。報告材料は、もうこれで、おしまいなのか。想いの外おも、すくないじゃ

ないか」

長官は、モロの方に不満そうなかおをむけた。

「ああ長官閣下。じつは、もう一人、報告をしてくるはずの者がいるのですが、とうとうこの時間に間にあいませんでした。すみませんです」

「もう一人というと、誰のことだ」

「は、それは……」

といつているところへ、卓上の電話が、じりじりとなりだした。

警部モロは、発条^{パネ}じかけの人形のように、その受話器にとびついた。

「——なんだ、なんだ。ポーンが、しきりに船をさがしているって、汽船を買いたいといっているのか。うむ、そいつは、すばらしいニュースだ」

警部モロは、電話で相手とはなしながら、長官アンドレ大佐に、
仰々^{ぎょうぎょう}しい目配せをした。

セメント問答

怪人物ポーニン氏の行動は、もはやそのままに見のがす事はできなかつた。

警備庁長官アンドレ大佐は、うでききのモロ警部に命じて、自称フランス氏のポーニン氏と会見させることとなつた。そのうえで、ポーニン氏が、なぜ九百トンもの多量のセメントを買いこんだのか、一応その事情について説明をもとめること。それと同時に、もし出来るならば、ポーニン氏は本当は何処の国籍を有する人物で、東洋へ来て、何を目標に活動をするつもりなのか、そこらのところも探偵すること。この二つのことについて警部モロは、命令をうけたのだつた。なかなか容易ならぬ仕事だつた。

警部モロは、この命令をうけるや、この町に出張所を持つ極東セメント商会出張所の外交員に、はやがわりをしてしまった。この商会のセメントは、値段が高いため、前になぞのポーニン氏から一度はなしはあつたが、取引はなく、そのままになつていたのである。警部モロは、またそのうち、きつとなぞのポーニン氏から口をかけてくるだろうからそのときは長官アンドレ大佐からめいぜられた任務を遂行しようと、網をはって、まっていたのである。

もちろん、警部モロの身分については極東セメント商会の出張所長と、秘書課員だけが知っていて、他の社員には、それを知らせてなかった。それは、あくまで事を秘密にはこぶためだった。

二三日経つて、この商会へ、自称フランス氏から電話がかかってきた。それによると、セメントを購^{こうにゆう}入^いしたいが、この前申出のあつた値段は高すぎるからすこしかんがえなおしてくれないか、返事を至急ほしいということだった。

商会では、この返事をするため、警部モロがポニン氏のところへ派遣されることとなつた。すべてはかねて仕くんでおいた芝居の筋書どおりであつた。

警部モロは、ポニン氏を、そのホテルへ訪ねていった。

ポニン氏は、今起きたばかりのところだといって、はれぼつたい^{まぶた}瞼^{まぶた}を、こすりながら、応接室へ出てきた。

一通りの挨拶があつて、値段のはなしになつたが、今度はポニン氏の腰は、すこぶる妥協的であつて、ほとんど極東セメント商会の言い値^{はなし}でもつて、話^{はなし}がまとまつた。

そのときモロはいった。

「ああもし、フランス様」

と、ポーニンの偽名のとおり呼び、

「じつは、手前の店の倉庫に、すこぶる格安のセメントが、相当多量にございますのですが、お買いもとめくださいませんかでしょうか」

ポーニン氏は、ぴくりと眉をうごかし、

「格安のセメントという」と

「さようですな、お値段のところは、まあ殆んど半額みたいなものでございます。まったく、ばかばかしい値段で……」

「それは、どうした品物かね。つまり品質のところは、どうだね」

「いや、その品質という奴が、すこし他のものとはかわって居りましてナ、そのところが値段をお安くねがついているところでございますが、つかいみちによっては、りっぱに使えますので……」

モロは、わざと、相手の求めているのを、知らんふりをして、自分に都合のいい方へ引張りこんでいく。なかなか達者なものだった。しかしポーニン氏も、二くせも三くせもある人物である。うまく警部の手にのるかどうか。

「値段のところは、まあどつちになってもいいんだが、普通品に比べてその品物の欠点と

いうと、どんなことかね」

「実は二三の欠点がございます。まあしかし、そのうち主な欠点というのは、太陽の光線に会いますと、表面が白くなつてまいります。つまり一種の風化作用が促進されるというわけですナ」

「ああ、太陽光線による風化作用か。そんなことはどうでもいいが、その他の欠点というのは……」

モロは、腹の中で、にやりと笑つた。

(うふ、ポーニン奴。太陽光線のことはどうでもいいといったが、するとポーニンのやつは、例のセメントを、太陽の光が届かないところで使うことを白状したようなものだ。ふふふ)

だが、モロは、それを顔かおつき付には一向出さず、

「あとの欠点は、それほど目立ったものではありませんが——まあもう一つは、つまりソノ、潮風とか塩気に当りますと、くろい汚点が出てまいりますんで」

といつて、モロは、ポーニン氏の顔色を、じつとうかがつた。

恐ろしき予感

「黒くなるというのは、品質が変わるという意味なのかね」

とたずねるポーニンの言葉つきには、真剣な色がかんんでいるようであった。

モロは、腹の中で、ふふふと、微笑をきんじ得なかった。

（ははあ、ポーニンの奴は、買いこんだセメントを、海洋方面で使うんだな。とうとう大事なことを白状してしまったようなものだ。俺も、なかなか大したうでをもっているわい）
だが、それはむねから下に、おさえておいて、

「いや、黒く色がつくだけのこと、べつに品質が変わるという意味ではございませんの
で……」

「もう他に、どんな欠点があるのか」

「いや、もうあとに、なにもありません」

「そうか。ではすこしかんがえたうえで、買うか買わないかを、はっきり決めよう。その

うちに、僕の方から電話をするからね」

「へい、どうもありがとうございます。どうぞよろしく」

警部モロは、ポーニンに別れると、すぐその足で、警備庁へかけつけた。

「おい、どうだったか、モロ警部」

「ああ、長官。ポーニンの奴は、はなはだ奇怪なところへ、あの多量のセメントを売りこむようですよ」

「ふん、そうか。それで……」

「第一に、そこは太陽の照つていない場所です。第二に、そこは、塩分がある場所なんです。どうです、お分りになりますか」

アンドレ大佐は、首を横にかしげて、怪訝けげんなおをした。

「なんだ、それは。まるで謎々パズルのだいみたいではないか。このいそがしいのに、そんな遊戯はよそうではないか」

「はははは。長官閣下、これは、遊戯的な謎々ではありません。現下の国際情勢ふくかいの複怪ふくかい奇性きせいを解く重大な鍵の一つでありますぞ」

「ほう、モロ警部。はやく結論をいったがいい」

長官アンドレ大佐は、自分の長い髭ひげを指先で、ちよいとおしあげた。

「つまり、長官閣下、これはポーニンの買いこんだセメントが、海底でつかわれることを物語っているのです」

「なんじゃ、海底でセメントを使う？」

「そうです。そのセメントは太陽光線で風化するぞと、私はポーニンにいったんですが、そんなことは平気だ、というのです。これはつまり風化をおそれないのではなくて、そこには太陽光線がとどかないから、だからおそれないという意味なんです。太陽光線のとどかないところといえば、海底か海底か、そのいずれかです」

「なるほど、手のこんだ推理だ」

長官は、別の髭の方に、指先をうつした。

「それから私は、潮風や塩分によつて、そのセメントはすぐくろくなるぞといったのです。ポーニンは、これをきいて、くろくなるということは、セメントが分解して変質でもするという意味かと、聞きかえしました。私は、そうではない。黒ずんで見た目がわるいだけのこと、品質にはかわりないといったところ、ポーニンは、それなら自分の使い途にはさしつかえないというので、近日はつきり注文すると約束をしてくれました」

「うん」

「つまり、これで判断すると、ポーンがこれからそのセメントをつかおうとする所は、塩気があるのです。——さきに申上げた第一で、海底か海底かのどっちかときまり、次の第二で、塩分の多いという条件が入れば、結局その答は、ポーンのやつ、海底でそのセメントをつかうのだということになるではありませんか」

「なるほど、なるほど。それでよく分った。たった二つの質問でもって、そのような重大事実をつきとめたとは、最近モロ警部はなかなか凄腕になったものだ」

長官からしきりにほめちぎられて、警部モロは、少々はなの先がむずがゆくなった。

「ところで、そのおくを洞察することが、肝かんよう要だて」

アンドレ長官は、モロをほめるのはいい加減にして、急に方向転換した。

「えッ」

「セメントを海底へもっていつて、一体何をするつもりかという問題じゃ」

「はあ、なるほど」

「なんだ、モロ警部。君が感心しては、こまるじゃないか。そのところが、事件の核心をつくものだとおもうが、君はまだその方をしらべきっていないのかね」

「はあ、まだですが……」

といったきり警部モロは、ぼうのように固くなった。なるほど、あのセメントを海底へもっていつて何をするつもりか。これはたいへんな大問題である。

サイゴン近し

謎のポーニン氏から、極東セメント商会の外交員を装う警部モロのところへ電話がかかってきた。

当時モロは、店にいなかった。

でも、モロがいなくてもポーニンからの電話には、すぐ出てくれるようにとの言伝ことづてが、官憲の名によつてきびしく命令されていたので、その電話は、すぐさま警部モロと声音のいた秘書課のラームという社員の机上電話につながれた。

「ラームさん」と商会の交換手がいった。

「例のフランス氏こと実はポーニン氏から、モロ警部さんあてにお電話よ。しつかりして、応対してくださいね」

「わーっ、とうとう来たか。よし、おちつくぞ。——つないでもいいぞ」

間もなく、くりっとおとがして、ポーニン氏の声はいつてきた。

「ああ、もしもし。フランスですがね。あなたはの間私のところへ来られた……」

「ああ、そうです、そうです。えッへん」

と、ラーム社員は、警部モロをまねて、わざとへんなせきばらいをした。

「ああ、わかりました」とポーニン氏は、へんなことに感心して、

「ところで、例の話のことですがね、すぐお出でをねがいたい。場所はモンパリという料理店です。私の名をいっていただけば、すぐわかります」

「ははア、承知いたしました。す、すぐにうかがいますでございます。えッへん」

といつて、受話器をおいたが、彼の額には、玉のようなあせが行列をつくっていた。

「おいおい皆、きいてくれ。フランス氏がモロ警部に会いたいというんだが、すぐ警部に電話で連絡をつけなきゃならない。一体警部は、今どこにいつとるのか、知っているやつはいないか」

社員ラームは、まわりの同僚のかおを、ずっと見廻みまわした。

「ああ僕が知っているよ。さつき御当人から知らせがあつたよ。料理店のモンパリにいるといつてたよ」

「えつ、モンパリ、なんだ、同じ店じゃないか。あらためて出かけるまでもなく、モ口警部は、モンパリにいるのか。なんだかはなしがへんだね」

「すこしも、へんじやないよ。モ口警部は、実は昨日から、ずっとフランス氏のあとをつけてまわっているんだよ。今の電話も、当人のモ口警部が、机の下かなんかにはいこんだまま、お先へ聞いてしまったかもしれないよ」

「うむ、なんでもいいから、すぐモンパリへ連絡しなきや、あとで大へんなおしかりに会
うぞ」

ラーム社員は、また電話器をとりあげて、料理店モンパリへの連絡をたのんだ。

ところが、電話が話中で、なかなか相手が出て来ない。ラーム社員は、髪の毛をむしつて、じれた。

丁度そのころ、このサイゴンの港から三十キロの海上を、問題のノーマ号と平靖号とが、おしどりのようにつながつて、西に航行していた。もう夕刻に近かつた。

「おいおい、竹！」

呼んだのは、船長ノルマンであった。

竹とよばれた水夫の竹見は、巨人のハルクと繫けいさく索の手入れをしているところであったが、うしろを向くと、そこに船長ノルマンが立っているのので、また例の皮肉な用事かと、舌うちをしながら立ち上った。

「なにか御用ですかい。こんどは、トップスルまで、十五秒半でのぼって御覧に入れますかい」

「だまって、わしについてこい。面白いものを見せる」

「面白いもの？」

どうせ、真直に面白いものではなかるうが、そういわれると、見ないではいられない。

水夫の竹見は、ハルクの方へ、それと眼くばせしてから、船長のうしろにしたがった。

「まあ、入れ」

「はあ。ここは船長室ですか」

「ふん、それがどうした」

「いやに綺麗ですね。へえ、今夜はなにか始まるんですか。これは小型映画の機械じやな

いですか」

竹見は、卓上につけている小型映画の映写機をさした。

「ははあ、おまえ、なかなかインテリだな」

「いえ、わしは活動の小屋で、ボーイをしていたことがあるんで」

「なんでもいい。面白いものを見せるといったのは、サイゴンに入港する前、お前にぜひ見せておきたいフィルムがあるんだ。今うつすから、まあそこで見ていろ」

「えっ。船長さん、おどかしっこなしですよ」

竹見が、椅子のうえにこしをおろすと、室内がぱっとくらくなって、スクリーンに映画がうつりだした。海の映画だ。

「あつ、あの船は！」

竹見は、おもわず、大きなこえを出した。

おお平靖号
へいせいごう

「あつ、あの船は！」

と、竹見がさげんだのも道理であった。スクリーンのうえに、とつぜん現れた汽船は、これぞ竹見が先に乗組んでいた仮装中国貨物船の平靖号であったではないか。

そのとき、竹見の背後で、船長ノルマンの、ふふふと、うすわらいをするこえが聞えた。

「船長さん。いまうつっているのは平靖号だが、いつ撮影したんですか」

と竹見は、たずねた。

「まあ、しずかにして、もつと先を見ているがいい」

船長のこえは意地悪い調子をおびていた。

映写機はことごととおとをたて、フィルムをくりだす。竹見は、だんだん目を大きく見開いて、画面にすいつけられたようになっていく。

画面の平靖号は、かなり大きくうつっていた。船長が、ほとんど画面の全部をうずめていくくらいの大きさだ。どうやら、これは倍率の大きい望遠レンズのついた器械でうつしたもののらしい。

そのとき、竹見がふと気がついたのは、平靖号の船腹に、一隻のボートが、大きくゆれながら、繫けいりゆう留りゆうしていることだった。そのボートには、不似合いな大きなはたが、はためいていた。

（おお、あれは軍艦旗のようだ！）

竹見は、どきんとした。いやなところを、船長ノルマンはうつしたものだ。これはどうやら、平靖号が、岸少尉の指揮する臨検隊を迎えたときの光景ではあるまいか。なぜノルマンは、こんなところを、映画にとつておいたのか、ふしぎでならない。

すると、画面は一変して、甲かんぱん板の大うつしとなった。また更に倍率の大きいレンズを、つぎ足したものとみえる。

甲板に整列している乗組員は、いずれも見覚えのある同志ばかりだった。両脚のない虎船長が、船員にかかえられて甲板に姿をあらわした。すると、画面に岸少尉が出てきた。つかつかと虎船長のところへ寄ると、しつかと握手をして、つよくふった。感激に虎船長の顔が歪ゆがんだようになるところまでが、いやにはつきり画面に出てきた。

画面は、それから下方に動いて、岸少尉一行がボートへ乗りうつるところがうつり、それから画面はまた甲板にもどつて、虎船長の感激のなみだにぬれた顔やら、幹部の万歳を

となえて手をあげるところや、はては水夫竹見のすがたまでがうつったものであるから、竹見はもうびっくりしてしまった。

「ふふふふ、どうだ、この映画は、さぞ貴様の気に入ったろう」

「うむ——」

船長ノルマンの皮肉な台詞にたいして、竹見は目を白黒するより外なかった。なぜ船長ノルマンは、こんな映画をとったのであろう。そしてまた今、わざわざ竹見をよんで、強制的に見せたのであろう。これは油断がならないぞと思った瞬間、竹見の腹の中は、熱湯が通ったようにあつくなった。

「わしには、よく分らないが、平靖号を映画にとるなんて、フィルムの方がもったいないじゃないですか」

「ふふふふ。相手は平靖号だから、こうして貴重なフィルムをついやすだけの値打があるわけさ」

「ふん、ばかばかしい。きつい道楽というものですよ。とび魚のとんでいるところや、甲板を怒濤があらうところなどをとっておいた方が、よほど値打がありますよ」

「あはははは。そうろうばい狼狽しないでもいいじゃないか。この映画を見れば、平靖号の乗組

員が、本当の中国人か、それとも偽せの中国人だか、よく分るのだ。これほど値打のある映画は、そうざらにあるものか」

そういつて、船長ノルマンは、映写をとどめ、まどをあけて室内を明るくした。竹見は、ここでノルマンにとびつき、首をしめてやろうかとおもったが、むこうでも油断なく竹見の方に気をくばっていて、すぐにもピストルをつきつける用意のあるのが見えた。

(もう、これは諦めるしかない)

えい、竹見は嘆息した。たしかにこの映画をみると、一同が日本人であることは、明白であった。

「船長さん。わしにこんな映画を見せて、それでどうしようというのですか」

竹見は、自分からお先に切り込んだ。

「ふふふ。貴様はなかなかはなせる男だぞ。そこでこっちのたのみというのは、平靖号まで貴様に、使いにいつてもらいたいのだ」

「なに、わしに平靖号へ、つかいにいけというのですかい」

憎むべき恫喝どうかつ

船長ノルマンがとつぜんいいだした用件というのは、竹見に平靖号へつかいにいけという意外な用事だった。

「そうだ、平靖号へいって、船長に、こっちの用件をつたえてくれ。その用件というのは、平靖号はこれからサイゴンに入港し、貨物を全部売りはらうかおろ下すかして、そしてあらためて新しい貨物をつんで出航してもらいたいのだ」

「なんです、それは……」

竹見は、急にノルマンの言葉がのみこめないという風だった。平靖号の積荷を、そう勝手に下ろしたり、変えたり出来るわけのものでない。

「はやくいえば、サイゴン港において、平靖号をやといたいのだ」

「ああ、雇やと船いせんとなるのですか。そいつは駄目だ」

竹見は、首を左右に振った。平靖号には、特別の使命がある。それをノールウエーの汽船なんかの船長に雇われて、航海をつづけるなんて、そんなことは出来ない。

「やかましいやい」船長ノルマンは、地金しがねを出して、厳しい口調で竹見をどなりつけた。
 「貴様に平靖号をやとうから承知をしてくれなどといったているのじゃない。むこうの船長に、こつちの命令をつたえりや、それで貴様の役目はすむんだ」

「命令？ 平靖号がそんな不法な命令を聞く必要がどこにあるものですか」

船長も竹見も、どっちもおおをこわばらせて、言いあつた。

「これは命令だ。このノルマンの命令なのだ。平靖号の船長が、それを聞かないといつたら、こういつてくれ。＼しからば、こつちは、お前の船が、中国人を装つた日本人の乗組員でうごいていることを、むこうの官憲に知らせてやる。こつちには、それを証拠だてる映画があるぞ」と、そういつてやるのだ。映画のことは、貴様に見せておいたから、どの位の値打のある映画だか、貴様から、よくはなしてやるんだ」

「それは脅きょうはく迫はくだ。恫喝きょうかくだ」

「ふん、なんとでもいえ。わしは、一旦決心したことは、やりとおす主義だ。さあ、これからすぐ用意をしろ、本船は、間もなく平靖号に接近して、停船信号を出す」

竹見は、なにもいわなかつた。いつても無駄であることが、よくわかつたのだ。船長ノルマンは、おもつたよりすごいやつであつた。一目で、平靖号の秘密をさとり、そしてそ

れを利用するため、その重大光景を映画にとつておいて、今それをつかおうとするのだつた。

竹見は、ノルマン船長の命令どおり、つかいにいくしかなかった。

「仕方がない。じゃあ、平靖号へつかいにいくことにします」
と、わるびれずにいった。

それを聞いた船長ノルマンは、大よろこびであつた。早速彼は電話器にかかつて、平靖号への接近を命令した。船は、すぐさま針路をかえ、そしてスピードを高めた。そしてヤードに新しくあげた信号旗をびらびらさせながら、平靖号の方へ近づいていった。

竹見は、身軽にふなばたに立つて、近づくと平靖号を、じつと見下ろみおしていた。

船長ノルマン、なぜきゆうに、平靖号への使者を出して、雇船を申し出たのであろうか。これより一時間ほど前、船長は秘密符号から成る電報をうけとつた。その電文によるとサイゴン港で、急に貨物船を雇う必要ができたから、海上において、至急、貨物船をさがしてくれ”といういみのことがしるされてあつた。発信人の名は、もちろん秘密符号でしるされてあつたが、それを解いてみると、ポーニンと出た。

ポーニン！

ポーニンといえば、フランス氏と仮りに名をかえ、サイゴンでしきりにセメントを買いこんでいるあの怪人物だった。

汽船ノーマ号の船長ノルマンと、怪人ポーニンとは、こんど始めての取引ではなかった。その間をあらえば、おどろくべき兩人の深い関係があらわれてくるであろう。

それにしても、奇怪さを倍加したのは、ノルマン船長である。ノールウエーの汽船が、ソ連の密使といわれるポーニンとの間に相当ふかい連絡があるというのは、一たいどうしたことであろうか。

水夫の竹見はおもいがけなく、ふたたび平靖号の甲板をふんだ。

同志たちは、いずれも竹見を歓迎してくれた。そして、彼が火薬船だと知ったのは、どういうわけかなどと、質問をかけられたが、竹見は、それにはこたえず、虎船長のもとへいそいだ。

虎船長は、それこそ猛虎が月にほえるような大きなこえを出して、ノルマンの無礼極ぶれいきわまる命令をいっしゅう蹴きした。

奇妙な相談

竹見は、虎船長とノルマンとの間にはさまって、まったくこまってしまった。

「船長。ああいう場面を撮影されちまったんですから、サイゴンに入港するとたんに訴えられ、そこでそのまま拿捕だほされてしまいますぞ」

「いや、われわれ日本人は、東洋水面において、他国人から威嚇いかくされる弱味は、なんにも持つていないんだ」

虎船長は、きつぱりとそういつて、ノルマンの申入れをしりぞけた。このことは、早速ヤード上の信号旗によつて、船長ノルマンへ通じられた。

すると、折かえしノルマンから、返事がおくられてきた。

「例の映画を、平靖号の行くさきぎきへ配布して、寄港を妨害するがよいか」

これに対して、平靖号からは、

「勝手にしろ、船長ノルマン」

と、やりかえした。そして虎船長は、ノーマ号の火薬に、何とかして火をつけて撃沈さ

せる工夫はないものかと、思った。

すると、またもや、ノルマンからの信号がやってきた。

「では、已^やむを得ない。貴船は、あと五分ののち、撃沈されるであろう。嘘だと思ふなら、貴船の左舷前方の海面を、仔細^{しさい}に観察してみるがいい」

すこぶる気味のわるい警告であった。虎船長は、すぐさまこのことをしらべるよう、命令した。

ところが、間もなく伝声管が鳴って、船橋から、たいへんな報告がとどいた。

「船長。潜水艦がいます。ノーマ号から注意のあったとおり、本船の左舷前方、わずか五百メートルのところに、潜望鏡が見えます」

「なに、潜水艦が、本船を狙って五百メートルの近くに……。うむ、そうか」

虎船長は、身体をふるわせて、いきどおったが、どうすることもできない。ノールウェーの汽船だというノーマ号が、潜水艦と結んでいるなんて、へんなことだ。すると、ノーマ号はノールウェーの汽船ではないのかもしれない。

潜水艦の襲撃をうけて、ここで沈没したのでは、せっかくここまで出かけた平靖号の使命は、それこそ文字どおりの水の泡となつてきえてしまう。虎船長は、無念やる方なく、

しばし黙考していたが、しばらくして、幹部を呼んで評定ひようじようを開いた。その結果、あらためてノーマ号に対して、信号を送ることとなった。

信号旗は、三度ヤードのうえに、するするとあがった。

「貴船の申入れを大たい諒承りようしやうした。くわしい返事は、水夫竹見を通じて申入れるから、しばらくまたれよ」

事実上、平靖号は、まんまと船長ノルマンの毒牙どくがに、かかってしまったわけだった。南シナ海方面で大いにあばれるつもりだった仮装中国汽船の平靖号も、ついにつまらない運命におちこんだ。そして水夫竹見は、虎船長の返事を持って、再びノーマ号へ、かえっていくことになった。

ここではなしは、サイゴンに飛ぶ。

怪人ポーニンは、フランス氏と仮称して、モンパリにおさまっていた。セメント会社の社員に化けている、警部モロは、ポーニンの室の前に現われ、とびらをたたいた。ポーニンはモロを呼びつけたのであった。用件は、多分例の安物のセメントの買いつけのことであらうとおもわれた。

「やあ、フランスさん。さつきはお電話を、ありがとうございました。急なお呼びは、何

の御用ですか」

と、警部モロは、商人らしい口のきき方をした。

すると、ポーニンは、いやににこにこ顔で、

「おいそがしいところをよびつけて、すみませんなあ。じつはお入りって、あなたに相談があるんです」

「はあ、セメントの値段を、もつとまけろとおっしゃるのですか」

「いや、その話は、べつです。後でしましょう」

「ははあ、セメントのはなしでないというと、はて、どんなことでしょうか」

警部モロは、ポーニンが何をいい出すかと、非常に興味をおぼえた。

「いや、外でもないが、あなたに大金儲けをさせたいんです」

「大金儲け？　ほう、この私にですか」

「そうですね、それには、あなたに、今つとめているセメント会社をやめてもらって、その代り、私の所有船の船長になつてもらいたいのです」

「えっ、セメント会社の社員をやめて、船長になれというんですか」

「私のもうけの二割を、あなたに提供します。数十万フランにはなるでしょう」

「一体その船は、何という船ですか」

「私が買う以前は、平靖号という船名を持っていた中国の貨物船なんです」

勇士の途^{みち}

平靖号のうえでは、水夫竹見をノーマ号におくりかえして、船長ノルマンの申入れを承諾することに決していながら、なおも議論は、沸騰^{ふっとう}した。

「ノーマ号に屈服するなんて、なにがなんでも、あまり情けないことです。船長、わが平靖号が日本を出発するときの、あの天をつくような意気は、どこへおとってしまったんですか」

「かりそめにも、ノールウエーの汽船のため、あごでつかわれるとは、日本男児のはじめです。あとのことはあとのこととして、サイゴンへ入らないうちにノーマ号の中へ斬りこんでは、どうでしょう」

「そうだ。それがいい。平靖号をノーマ号のそばへ持つて行って、いきなりぶつつけるのもいいとおもう。竹見のはなしによると、むこうの船は、火薬船だということだから、こっちからぶつつけたとたんに、火薬が爆発して、船長ノルマンはじめ船もろともに、空中へふきあげられてしまうだろう。ねえ、船長。それをやってみようじゃないですか」

なにしろ血の気が多くて、祖国日本をとびだした連中のことだから、平靖号が、ここでノールウエー汽船の雇やといせん船せんになつておわるというのでは、躍る血潮の持つていきどころがない。だから一つの議論が、さらに二つの議論を生むという調子で、船長室の中は、われるようなさわぎとなつた。

虎船長は、若者たちの、熱血あふるる言葉を、じつと目をつぶつて、聞いていた。事務長その他、高級船員は、むしろ、若者の留とめやくにまわつたのであるけれど、自分たちとても、もともと胸中にたぎる武ぶき俠ぎやう精せい神しんの所有者だつたから、あたまから、若者たちをしっかりとつけるわけにはいかない。もうこの上は、虎船長の裁さい断だんをまつよりほかに、手段はなかつた。このとき船長は、やつと両眼をぱつと開き、一座をずつと見まわすと、

「おう、聞け。さいぜんから、お前たちのしゃべっていることは、わしのこの胸の中に、ちんちん煮えたつているものと、全く同じことじゃ」

そういつて、虎船長は大きな拳固げんこをかため、自分の幅広いむねを、どんとたたいた。

「じゃあ、船長……」

「まあ、聞け」と虎船長は、制して、

「だが、われわれは匹夫ひつぷの勇をいましめなければならぬ」

「えつ、いまさら、匹夫の勇などは……」

若者連中は、匹夫の勇といわれて、おさまらない。

「まあ、しずかにしろ。——これが、わが平靖号の壯途そうとの最後に近い時ならば、それは、だれかがいったように、こっちの船体を、ノーマ号の船体にぶっつけ、ともに天空へふきあげられてけむりになってしまうのも、わるくない。だが、かんがえてもみる。平靖号は、まだやつと祖国の領海をはなれたばかりのところじやないか。壯途にのぼりながら、まだ一回も、壯途らしいことをやったことがないのだ。おい、そうでないというやつは、いないだらう」

それは、そのとおりにちがいない。平靖号が航海にとびこんでからこっち、多少、風ふうろ浪ともみ合ったり、横合よこあひから入って来た危難を切りぬけるのに、ほねをおったぐらいのことで、こっちから仕かける壯途らしいことは、ただの一回もやったことがないのだ。

この虎船長のことには、だれも反対をとなえる者がいなかった。

それと見定^{みさだ}めたうえで、虎船長は、こえをはりあげていった。

「なにごとも、自分のおもいどおりになるものじゃないのだ。全力をつくしても、そこには運不運というやつが入ってくる。時に利のないときにも、かならず突破しなければならぬとおし出していくのは、猪武者^{いのししむしや}だ、匹夫の勇だ。すすむを知って、しりぞくを知らないものは、真の勇士ではない」

「じゃあ、船長は、どうしろというのですかい」

若い船員は、虎船長の長談議にしびれを切らして、こえをかけた。

「だから、わしはお前たちに、かんがえなおせというのだ。あんな不利な映画まで撮ったノルマンという船長は、只者^{ただもの}ではないぞ。汽船^{きせん}だって、ノールウエー汽船とっているが、そうじゃあない。ここは、こっちの負けだ。こっちに油断があつたのだから、仕方がない。負けを負けと承知して、しばらく運ともにながれてみようじゃないか」

「運とながれるって、船長、どうしろというのですか」

「つまり、しばらくノルマンのいいなり放題になつてのことさ」

「ううん、癪^{しゃく}だなあ」

「そうして様子をうかがっていれば、そのうちに、むこうにきつと、油断ができるにちがいない。そのときこそは、わしが号令をかけるから、そこでみな立って、日東健児の実力をみせてやるのだ。わしの好きな大石良雄はじめ赤穂四十七義士にも、時に利あらずして、雌伏しよくの時代があつたではないか」

サイゴン港

虎船長の説得が、功を奏して、さしもの平靖号の若者たちも、別人のように、しずかになつた。

竹見水夫も、妙にはにかんだようなかおをして、ふたたびノーマ号への使者となつて、ボートにのつて出かけた。

船長ノルマンは、竹見の口上をきいて、わがことなれりと、大よろこびだ。

「うわっはっはっ。はじめから、あつさり、それを承知すればいいのに。つまらんことで、

いい加減、手数をかけやがった。さあ、おくれた船足をとりかえして、先へいそごうぜ」
 「はい、はい。心得ました」

一等運転士は、操舵そうた当番へ、大ごえで進航命令を下した。それと同時に、平靖号へも、全速力で、ノーマ号の先登せんとうに立って、ドンナイ河の河口をさかのぼるようにと、信号旗を出した。

目的地のサイゴン港は、ドンナイ河をさかのぼること六十キロのところにある。つまり、陸岸にはさまれた河のみなどで相当まがりくねっている。だから、港の中は、たいへんおだやかである。軍港はすこしはなれたところにあるが、こっちの港には、大小おびただしい数の汽船が、安心し切つてぎつしりと舷と舷とをよせ合つて、碇ていはく泊している。

平靖号は、後から監視の目を光らせているノーマ号からの指令にしたがつて、なにごとにもさからわず、命令どおり忠実に港へ入つていった。連日みだし切れないむねを持ってあましていた平靖号の船員たちも、異色ある亜熱帯地方の風物が、兩岸のうえにながめられるようになって、すこしばかし、なぐさめられた。

「いよいよ、やってきたぜ。あれみろ、妙なかつこうの寺院みたいなものが見えらあ」
 「ふん、あれはノートル・ダムだろう。おれたち俘虜ふりよども一同そろつて、はやく武運をさ

ずけたまえと、おいのりにいこうじやないか」

「やかましいやい。捕虜だなんて、おもしろくねえことを、いうもんじやない」

そのうちに、両船は相前後して、投とうびょう錨びょうした。お互いに、すねにきずをもっていることとて、仏官憲の臨りんけん検けんを、極度に気にした。だが、そこはどっちも、相当のしたたかものことだから、なんとかかんとかいつて、うまく仏官憲を丸めて、退船してもらった。狐と狸とで、同じ人間を化かしつこしたようなものだった。臨検官は、御丁寧にも二重に化かされていながら、なんにも気がつかないというのだから、まことに御苦労さまな次第だった。

怪人ポーニンが、平靖号にのりこんできたのは、その夜よふけてのことだった。

丁度ちやうど虎船長は、明日積荷を売るについて、その準備に、帳簿と書類の間にうずもれて、きりきりまいの最中だった。そこへ、当直の二等運転士が、注進のため、船長室へとびこんできた。

「船長。いよいよ来ませましたぜ。船長ノルマンが、七八人ひきつれて、船長に会いたいといつてやってきました。竹見の奴も、いけしやあしやあと、案内に立っていやがるんです」

「なに、もうノルマン一行が来たか。おい、事務長。ここはいいから、お前がすぐいって、

応接しろ」

そういつているところへ、ノルマン以下は、竹見を先に立てて、つかつかと、船長室へふみこんだ。

「おい、竹。どれが船長だ」

竹見は、唇をぎゅつとかなで、無念そうにノルマン船長の命令を、きいている。

「そこにすわっているのが、虎船長です。両脚がないんだから、椅子から下りて、気をつけをしろなどは、いわないようにねがいますよ」

「ふん、そうか。わしは、足のない船長に、用事をいいつけようとはおもわない。新しい船主のフランス氏も、同じことをいつていられるよ」

ポーニン氏は、眼をぎらぎら光らせながら、虎船長の、こしから下を、見ていたが、「なるほど、これじゃあ、船長のやくめをやってもらうのは気のどくだ。よろしい。この船は、貨物ぐるみ、一千五百フランで買うことにして、このロロー氏を、新たに船長に任ずる。よいか、虎船長とやら」

よいもわるいもない。虎船長は、フラン紙幣をうけとって、その代り、船長の服と帽子とを、ロロー氏に手わたした。

「たしかに、引き上げました」

と、ロロー氏は、にこにこがおでいって、虎船長の手をにぎった。ロロー氏というのは、外でもない。警部モロの変名だった。

新船長

「ええ、船主のフランスさま。この船が、つんでいる雑貨は、どのくらいの利益で、売りはらえばいいですかなあ」

警部モロは、虎船長がまだ、しろうちしたともいわないさきから、もう船長気取りで、船主となったポーニンに、相談をかけた。

虎船長も、さすがに、ゆがんだかおで、この場の成行なりゆきをじつと見おくっているばかりであった。だから、若い船員たちは、或る者は、紙のように白い顔となり、また或る者は朱盆しゅぼんのように、真赤な顔になっていた。一等運転士が、それをしきりに、止めている。

フランス氏を名乗るポーニンは、にやりにやりと、あたりをながめまわし、

「いや、本船の積荷を売りはらうことは、いずれゆつくり、かんがえることにして、まず大いそぎで、この積荷を下ろしてもらいましょう」

「へえ、すぐというと、今夜にもといういみですか」

「そうです。夜分の荷役は、なかなかむずかしいといつかもしれないが、やってやれないことはない。さあロー船長。はじめて船長になったあなたのでだめしだ。すぐはじめてください」

ポーニン氏は、平靖号の荷を下ろすのを、たいへんいそいでいる様子だ。

「下ろしただけで、いいのですか。そんならやりましょうが、下ろしたあとで、船員たちの労をねぎらう意味で、酒をのませてやってください」

と、新船長さんは、なかなかぬけ目がない。他人のふんどしで、相撲をとるのたぐいであった。

「酒？ 酒はのませるが、もつと後のことだ」

ポーニンは、難色なんしよくをしめした。

「もつと後とは、いつのことですか。酒なんてものは、はやい方がいいのだが……」

「それは、私がゆるしません。酒をのめば、仕事をする力がなくなる。ここはなんでも、私の命令どおり、まず雑貨をいそいで下ろし、それに引きつづいて、セメントをいそいでつみこんだ上で、酒宴しゅえんをゆるすことにしましょう」

「はあ、セメントを、はやくつむことが必要なのですね。どうして、そんなにセメントをはやくつみこまなければならぬのですか」

警部モロらしい質問のもつていきかたであった。

「それは、こつちに必要があるからだ。そうすれば、ロロー船長、あなたのもうけも、うんとふえる」

そうはいったが、それは返事になつていないようであった。

「私も、大金儲けはしたいですがね」と、警部モロは、わざとにやりと笑顔をつくり「だが、船長となつた以上は、船員の厚生福利をかんがえてやらねばなりませんでねえ。まるで牛馬か人造人間のようになつて、部下を使役することは、できません。もつともこれが船火事になつたというような非常時なら、べつですがね」

船長ロロー役の警部モロは、下したころ心があつて、なかなか怪人ポーニンの意にしたがわない。

ポーニンとしては、ロローに金もはらったことだし、今さら予定を変えることもできないので、だんだん船長ロローにひきずられていく形となった。

「うう、こまったやつだ」

と、ポーニンは首をふって、

「おい船長。われわれは、いま事業のうえで、非常時に立っているのだ」

「どうも、わかりませんね。雑貨をセメントにつみかえることが、なぜ非常時なんですか。私は船長として、部下にたいし、わけのわからないことに、無闇むやみに力を出せとは、命令しかねます」

「どうも、こまったやつだ」

と、さすがの怪人ポーニンも、ここでいらだたしさを、かくすことができなくなってしまう。

「じゃあ、仕方がない。おい、船長ロロー。君だけに、わけをはなそう。他の者は、ちょっと、この部屋から、出ていってくれ」

と、いって、ポーニンは、虎船長をはじめ余人を、ことごとく去らしめ、そのうえで、なおもこえをひそめて、モロには、

「君、こまるじゃないか。すこしは、こっちのむねの中を察してくれなくちや。日ごろ、あたまのいい君にも似合わないぜ」

「一体どうしたというんです。そのわけというのは」

「あべこべに、取調べをうけているようなかつこうだ。いやだね」

と、ポーニンは、あごへ手をやって、

「じつは、こうなんだ。私が今、うけおっている仕事というのは、海の底に、潜水艦の根拠地をつくるという大仕事なんだ」

「ええつ、海のそこに、潜水艦の根拠地を？ 一たいそれは、どこの国の計画なんですか」

身辺の危険

怪人物ポーニンと警部モロとの間に、どんな程度のはなしがとりかわされたかは、つまびらかでない。が、とにかく二人は、間もなく平靖号の船長室から、至極仲がよさそうに、

すがたをあらわした。

もとの虎船長、つまり虎松とらまつとなにか無駄話をしていたらしいノーマ号の船長ノルマンは、これを見ると、立ち上つて、

「どうしました。荷あげのはなしは？」

といった。ノルマン船長も、ポーンには一目も二目もおいているらしい様子だ。ポーンは、にやりと、うす気みわるいわらいをもらし、

「ふふん、どうもこうもない。計画したことは、途中でどんな邪魔がはいろうと、かならずその計画どおりにやりとげるのが私の主義だ」

「すると、すぐ、この平靖号の荷役がはじまるというわけですな」

「もちろん、そのとおりで。君の船からも、出せるだけの人数を出して手つだわせてもらうかい。あの方の仕事は、一日でもはやくかからないと間に合わないからね」

「はい、わかりました。では、帰船して、力のあるやつを、できるだけたくさんかり出しましょう」

「うん、そうして呉れ、私も一しよに、君の船へいこう。ほかに、すこし相談したいこともあるから……」

怪人物ポーニンは、警部モロや、虎松以下の乗組員におくられ、船長ノルマンとともに、平靖号を退船した。

あとで、平靖号のうえでの、ひそひそばなし。

「なんだい、あの白人は。いやに、すごい目を光らせていたじゃないか」

「あいつが、この船を買って、セメントをつみこむんだとき。どうも、この平靖号もおかしなまわりになってきたのう」

「虎船長にもう一度いつて、今夜のうちに、サイゴンからずらかることにしちや、どうか
な」

「そうもなるまい。ノルマンのやつは、どうやらこの土地でも、にらみが利く男らしいから、うっかりしたことはできない。まあ、虎船長のはなしじゃないが、こちとらは時節を
まっているんだね」

「どうも、いまましいあのノーマ号だ」

さだめし、ポーニんとノルマンは、小艇をノーマ号の方へ走らせながら、たびたびくさめを催したことであろう。

そのポーニんとノルマンは、小艇のうえで、ぴったりよりそって、ぼそぼそと、秘密の

会話をつづけている。

「とにかく、私の失策だ。どうも、すこし功をいそぎすぎた恰好だ」

そういつたのは、ポーニンだった。

「どうもよくのみこめませんが、一体どういうわけで……」

「さあ、それだがねえ、ノルスキー」と、ポーニンは、船長ノルマンのことを、ノルスキーと呼んで、「ちよつと頭脳あたまがきくやつだとおもつたから、これは金さえくれてやれば、うまくこつちの役に立つとかんがえたんだ。まさか、そのすじのものとは、おもわなかつたよ。つまりあの船長ローは、そのすじのまわし者にちがいないということが、はつきりしたんだ」

「へえ、おどろきましたな。どうもまずいことになったものだ」

本名ノルスキーの船長ノルマンは、ちよつと、くさつた様子であつた。

「船員に酒をのませるとかなんとか、いいがかりをつけて、そのじつ、こつちの仕事の様子をさぐるのが彼奴きやつの目的だつた。さすがは商売だけあつて、はじめのうちは、至極しごくすらすと、私にしゃべらせおつた。近ごろにない私の大黒星だ」

二人の話していることは、警部モロの身の上になちがいがなかつた。モロの追ついきゆう窮ゆうがあま

りにきびしかつたので、ポーニンもようやくそれと、彼の素性すじょうに気がついたのであった。

「このうえは、彼奴を、なんとかしなければなりませんね」

「そうだ、そのことだ」

とポーニンは、またさらに顔をノルマンの方に近づけ、

「さつきから、それをかんがえていたが、こういうことにしようとおもう。耳をかせ」

ポーニンは、船長ノルマンの耳に、なにごとかをささやいた。

すると、ノルマンは、急にはつと息をとめ、

「えつ、青斑あおまだらの毒蛇どくじやを……」

「これ、声が高い！」

ポーニンは、ノルマンの口に手をあてて、あたりへ気をくばった。

サイゴンの港湾部や税関の方へは、うまくはなしをつけたものと見え、それから夜にかけて、平靖号の搭載貨物の大荷役が、たいへんなさわぎのうちに行われた。

ノーマ号の船員や水夫たちも、やむを得ず自船じせんに停らなければならぬ者のほかは、全部平靖号へ出かけ、荷役を手つだった。

船と陸とは、おしげもなく灯火がてんぜられ、まるでみなとまつりの予行演習であるかのようにおもわれた。

荷役は、深更しんこうまでつづいた。

竹見水夫も、あせみどろになって、船と陸との間を何十回となく往復した。

巨人ハルクも、もちろん、労働の花形であった。彼は陸上の倉庫の方ではたらいっていた。警部モロは、ポーニンの口から重大な秘密をきいたので、これを何とかして、本部へ知らせたいものと、荷役の指揮をとりながら、しきりにじれていたが、船長ノルマンやポーニンのめが、いつかなそれをゆるさず、そのために、モロは、いくたびも、海へとびこみたくなつたほどである。

「どうですか、ローローさん。船長のやくわりというやつは、なかなか大したものではないかな」

ポーニンは、わざとモロのそばへすりよつて、そんな風にはなしかけた。

「なあに、大したことはありませんや。このあんばいじゃ、夜明けまでにかたづくでしょう」

「いや、私はもつとはやいような気がする。もう下には、いくらも貨物がのこつていませんよ。すめば、あなたの申出があつたように、酒を出します」

「ああ、酒なんか、もうどつちでもいいです」

「いやいや、御遠慮はいらない。倉庫のところからすこしいつたところに、あなたも知つているでしょうが、雑草園という酒場がある。あそこへ酒の用意をさせましょう」

「えつ、雑草園ですか。もう、そこへ酒をたのんだのですか」

「いえ、これからのむところですよ」とポーニンはいったが「そうだ、あなた一つ雑草園へいつてたのんでみてくれませんか。こっちの荷物は、もういくらもなさそうだから、あなたがいなくてもいいでしょう」

「そうですね、いつてみますかねえ」

と、警部モロはこたえたが、そのじつ彼は心の中で、たいへんよろこんでいた。いよいよだれにも気づかれず、至極自然に上陸ができることになったのだ。

警部モロが、いそいそと舷側げんそくを下りて、小艇の中にすがたを消したのを見すまして、平靖号の甲板かんぱんのうえから、それを見おくついていたポーニンとノルマンは、してやったりと、目を見合わせてにやりとわらつた。

「うまくいきそうですな」

「ふむ、やつこさん、雑草園へいけば、きつとガーデンの卓子テーブルの前にこしかけて、一ぱいやりたくなるにきまつている。そのとき、なんとかいった大きな男が出ていって、うしろから知れないように、うまくやるだろう」

「ああ、あれは巨人ハルクです。青斑あおまだらの毒蛇どくじやは、ハルクにわたしておきました」

「ハルクか。そのハルクは、きつとうまくやるだろうね。毒蛇を仕こんでおいたステツキの蓋ふたの明け方を、彼はよくおぼえただろうね。あれは、知らない者がやっても、決して明かないように、複雑な機構にしてあるんだ」

「あの明け方は、一度や二度きいたのでは、おぼえきれませんよ。ですから、私は、予めあらかじ蓋をもうすぐ明くというところまで外して、ゆるめておきました」

と、船長ノルマンは、したりがおにいった。毒蛇は、仕掛のあるステツキの中に入れてあるらしい。一体、その毒蛇を、どのようにつかうのであろうか。

「それは危険だ！」

と、ポーニンが、まゆをつりあげていった。

「それは危険だ。もし、ステッキの蓋が外れて、毒蛇がはい出す。そして、ハルクにかみつくと、ハルクが死んでしまう。すると肝腎かんじんの船長ローローをかたづける計画が、だめになつてしまう」

船長ノルマンは、しばらくだまつていたが、

「そんなに心配なら、私も上陸しましょう。そして、もしハルクが、やりそんじたら、こいつでかたづけてしましましょう」

と、胸のポケットの上をたたいた。そのポケットの中には、彼ら一派が愛用している万年筆の形をした消音小型ピストルが入っていた。

「それをこんなことにつかうのは、感心しないぞ」とポーニンは、くびをふった。「弾だんこ痕んや弾丸から、われわれが何処の国籍の人間か、すぐ判断されてしまう」

「じゃ、彼奴きやつのうしろへまわつてくびをしめしましょう。そしてだれにも気づかれぬうちに死骸しかいをうまくかくしてしましましょう。われわれの出帆までに発見されなければいいでしょうから」

警部モロの身の上について、おそるべき相談が、怪人物ポーニんと、船長ノルマンとの間に出来た。

あさりようじ
荒療治

なにも知らない警部モロは、上陸すると、すぐその足で、酒場さかば雑草園へいった。それは、まず忠実にいいつけられた用事をはたし、ほかからうたがいの眼をむけられないためであった。まさか彼は、そのような細心の注意が、もはや無駄だとは知らなかった。

警部モロは、ビールがすきであった。

だから彼は、その夜の饗きょうえん宴えんのことをすっかりたのんでしまった後で、ボーイに、ビールを所望した。

「じゃあ、旦那さん。あつちに、すすしいしずかな席がございますから……」

と、ボーイは、警部モロを、この酒場の名のとおりのの雑草園の方へ案内し、そこにとこ

ろどころに置いてある野外席の卓子へみちびいた。

むしあつい夜だったので、そよ風吹くその卓子は、警部モロを悦よろこばせた。そして彼は、ここ暫くつづいた敵中の緊張を、一時ほぐすために、ビールの大コップをとりあげたのだ。それは、実にすばらしいビールのあじだった。モロは、生れてはじめて、ビールがこんなうまいものかと、おどろいた。そうであろう、そのビールこそ、彼の末期まつごの水であったのだから。

雑草園のものかげに、巨人ハルクは、原地人のふくを着て身をしのばせていたが、船長ノルマンからいいつけられたとおり、モロの卓子に、当のモロの外、誰もいなくなったのを見すまし、例のステツキを持って、のこのこ出ていった。

「もし旦那さん。ステツキをおとどけ申します」

警部モロは、もうすこしあかいかおになっていたが、

「ステツキ？ 一体そりや何事だ」

と、こわい眼で、ハルクを見た。

「さあ。わしはなんにも知りませんが、今雑草園へ入っていった旦那に、このステツキをわたしてくれと、たのまれましたのです」

「ふーん、それをたのんだのは何者か」

「さあ、わしの知らない人ですが、どうやらそのすじの人らしい……」

「よし、わかった。もう後をいうな。ステツキをこつちへよこせ」

ハルクは、フランス語をすこししやべる。それをノルマンが利用して、この芝居をやらせているわけだった。

ハルクとしては、めいわくこのうえもないが、まさか相手が、土地の警部であり、そしてハルク自身が今殺人に取り懸っているなどとは知らない。一方、警部モロはモロで、ハルクのことを本部からの連絡密使であると、かんちがいをしてしまった。

黒いステツキのあたまが、モロの方へさしだされた。ハルクは、そのステツキの根元をもつて、さしだしたのであるが、それもノルマンからいわれたとおりにした。すると、彼の手は、^{ボタン}鈕をおさえたことになる。とたんに、ステツキの蓋が、ぱちりとあいた。その瞬間ステツキがにゅつと伸びたように見えた。

「あつ、あツツ！」

それが警部モロの最後のこえだった。ステツキの中にひそんでいた青斑^{あおまたら}の毒蛇^{どくじゃ}が、蓋が明いたとたんに、警部モロのゆびさきに咬^かみついたのである。

モ口は、めんしよく面色の土のごとくになり、バネじかけ発条仕掛の人形のように、突立ちあがり、椅子をたおした。彼の左手が、ぶるぶる震えるなわのようなものを、右手からひきちぎった。そしてハルクめがけて、ぱつと投げつけた。それは青斑の毒蛇だった。

「あつ！」

ハルクは、ふって湧いた意外な事件にすこしぼんやりしていたところだった。とびついで来るものが蛇だと知ったとき、ハルクは、こぶし拳をかためて、ぴしりと蛇を払いのけた。蛇は足元におちて、がさがさと音をたてた。

「こいつ奴め！」

ハルクは、それがまさかおそるべき毒蛇だとまでは気づかず、こんどは、足をあげて、うむと、蛇をふみつけた。

「おう、うまくいった。ハルク、その先生をこっちへ抱いてこい」

突然ハルクに呼びかけたのは、船長ノルマンだった。

「あつ、船長」

「余計な口をきくな。はやくやれ、はやく。その先生をかかえて、こっちへ来い」

警部モ口は、酒をのんでいたところへ、毒蛇に咬まれたので、たちまち毒が全身にまわ

って一命をおとしてしまったのである。

ノルマンは、ハルクに手つだわせ、彼が怪訝けげんなかおをしているのをしかりつけながら、警部モロの死骸を、下水管の中へ放りこんで、しまつをしてしまった。

「まず、これでいい」

「船長、ひどいことをするじゃないか。わたしには何にもいわないで……」

「れいをする。だから喋しゃべるな」

「毒蛇をわしにあずけておいて、用心しろ、咬かまれるとお前の生命があやういぞともいつてくれなかったのは、いくらなんでも……」

といっているうちに、どうしたわけか、ハルクは、急にあわてだした。

蛇じやどく毒は廻る

「船長、ま、まっってくださいえ」

ハルクは、くるしそうにあえぎながら、ふりしぼるようなこえでいった。

「なんだ、ハルク」

と、船長ノルマンは、うしろをふりかえったが、ハルクは、やけつくようないきをはっはつと、はいている。

「おや、お前どうした、ハルク」

「あ、いけねえ……」

「なに、いけない。なにが、いけないというのか」

船長ノルマンが、懐中電灯をてらして、ハルクにさしつけたときには彼は、くちびるを紫色にし、死人のようなかおをしていた。

「うむ、さては」

「船長。あの蛇は、毒蛇だったんだな」

ハルクは、ぎりぎりと言をかみあわせた。

船長ノルマンは、無言だ。おもいがけないことになって、彼は善後処置をかんがえているらしい。

「おれは知らなかった。あの男を殺す役目をいつかっていたとは知らなかったんだ。だ

が、そのぼつがあたつたんだ、おれは、毒蛇に足を咬まれてしまった。ああ、あいた……」
 巨人ハルクは、どきつと、地上にうちたおれた。

「こら、ハルク。しつかりしろ。お前が、どじをふんだもんだから、だれをうらむこともないぞ」

「なにを、船長ノルマン。お前は、ず太いが、卑怯者だ。ひきょうものなぜ、正直者のおれに人ごろしをさせた。しかもおれには、わけもなんにも知らせないで……。おれをペテンにかけやがった。正直者のおれを……」

巨人ハルクは、傷口の上を両手でけんめいにおさえて、うらみのことばをノルマンになげつけた。

そのとき、雑草園の本館の方から、がやがやと、人のさわぐこえが、きこえてきた。

船長ノルマンは、ここで人に見つかってはあとが面倒だとおもったので、ハルクのかたを叩き、

「おい、ここじや、具合がわるい。かたをかしてやるから、つかまれ。あつちで、医者に診せてやるから」

「うーん、いたい」

ハルクは、口で、自分のシャツを、ペリペリと引き破つた。それから、片手をつかつて、ギリギリと巻き、それで右脚を、ふくら脛はぎのうえで、かたく縛つた。その間も、彼はたえず、獣のようにうなつたり、はあはあと、あらいいきをはいたりした。

雑草園の中は、ますますさわがしくなつた。ノルマンたちのことに気がついたのか、それとも酔よっぱらいがさわいでいるのか、はつきりしなかつたが、とにかく、はやくむこうへいかないと、とがめられる恐れがあつた。

「さあ、しつかりつかまれ」

船長は、そういつて、ハルクにかたをかした。そしてかけるように、速歩そくほで歩きだした。「うつ、くるしい。もつと、しずかに……」

「ちえつ、なんだ、ふだんは巨人ハルクといわれていばつているあらくれ男のくせに。これくらいのことねで音をあげるたあ、死しに損そこないの女の子みたいじゃないか」

「ま、まつて……」

「しつかりしろ。ぐずぐずしてりや、二人ともつかまつちまう」

船長ノルマンは、有名な強ごうりき力だつたから、巨人ハルクのうでをかたにかけ、彼の巨体を、ひきずるようにして、どんだん埠頭ふしとうの方へいそいだ。

やがて二人が近よったのはぷーんと異様な臭気のただよっている倉庫だった。その倉庫の入口は明いて、しきりに物をはこびこんでいる。そこはつまり、平靖号の積荷をはこびこんでいる例の倉庫だったのである。

「あつ、船長」

ノーマ号の火夫かふの一人が、目ざとく、二人をみつけた。

「おう、だれにもいうな。こいつ、意気地いけじがないから、やられちまったんだ。おくへ入るから、だれにもだまつているんだぞ、いいか」

「へい、へい」

火夫は、ペこペこあたまをさげた。彼も、船長ノルマンのおそろしいことは、知りすぎるほど知っていた。ノルマンは、肩にしていたハルクを、倉庫の一等おくまつたすみへ、たわらでもなげつけるように、ころがした。

「ううツ……」

といったきり、ハルクは、死人のようにぶったおれ、そのままうごかない。

船長は、足をあげて、ハルクのかたをけた。ハルクは、上むきになった。ひどい形ぎよう相そうであった。

「ふん、此奴は、もうだめらしい」

鬼船長

そこへ飛びこんできたのは、竹見水夫だった。

彼は、船長ノルマンの姿をみるや、

「ハルクが、やられちまったそうですね。何処にいますか、ハルクは？ 一たい、どの野郎と喧嘩をしたんですか」

と、あたりをきよろきよろとうかがう。ノルマンは、無言で、竹見の間に、通せんぼうとおをして立つ。

そのとき、ハルクが、一声うなつた。

「あつ、ハルク。お前、どこにいるんだい」

竹見は、ようやくハルクが、貨物のかげにたおれているのに気がついたようであった。

彼が、ノルマンの間をすりぬけて、後へとびこもうとすると、奇怪にも、ノルマンは竹見の肩を力まかせに、どんとつきとばした。

「あつ、……」

竹見は、不意^{ふい}を食^{くら}つて、その場によろよろ、しりもちをついた。

「船長、な、なにをするツ」

竹見は、あわててとび起きると、すさまじい形相で、みがまえた。

「さわぐな。お前には関係のないことだ。むこうへいけ——」

「いやだ、仲間のくるしんでいるのを知つて、放っておけるものですか」

「なに、反抗するか。竹、船長の命令だ。おもてへいって、お前は仕事をつづけろ」

「いくら命令でも……」

「うるさい野郎だ。じゃあ、早いところ、はなしをつけるぞ。これでも、おれの命令にしたがわぬというか」

船長ノルマンの手には、きらりとピストルが光った。

「やつ」竹見は、いきを、はつととめた。「それほど——いや、向うへいきますよ」

手元へ飛びこんで組^{くみうち}打とも考えたが、船長と格闘することよりも、自分に親切にして

くれたハルクの安否あんびをはやく見てやりたいとおもったので、齒をくいしばって我慢した。そして倉庫の出口へ出ていった。

船長ノルマンは、ぴゅーと、唾をはくと、やはりハルクのことが気になると見え、彼の様子をのぞきにいった。

「あつ、船長。手をかしてくれ」

ハルクは、こえをふりしぼってさげぶ。

「なんだ、ハルク」

「ここんところを……」といって、ハルクはひざがしらをさし、

「ここんところを、船長のカ一ぱいにしばってくれ。毒が……毒が……」

さつき彼のふくらはぎのところを自分で縛しばったが、それがゆるんで、蛇毒じゃどくが上へまわるのをおそれてのたのみだつたらしい。

だが船長ノルマンは、ぬツと立ったまま、あわい電灯の光の下に、冷やかにハルクを見み下ろすばかりだった。

「船長。は、はやく……」

「おい、ハルク」

「ええッ」

「くたばるものなら、はやくくたばってしまえ」

「な、なんと……」

「そうじゃないか。お前の不注意で、蛇にかまれたんだ。そのおかげで、おれにまで、つまらない心配と、無駄な時間とをついやさせやがった。お前がはやく死んで呉れれば、おれはたすかるのだ。おればかりではない、全乗組員も、ポーニン委員も、皆たすかるんだ」

「ううーッ」

「お前も、そのくらいのは、察しがつくだろうがな。お前を医者にかけてみる。お前が雑草園で、なにをしたかということが、すぐ世間へばれてしまうじゃないか。ノーマ号と平靖号とが、特別の積荷をそろえて、無事このサイゴン港を出航できるまでは、お前のその身体は、だれにも見せたかないんだ」

「うう、この悪魔め！」

「こういうわけだと、そのわけを聞かせてやるのも、あの世へたび立つお前への手土産のつもりだ。もつとも、医者にみせたつて、この有様じゃ、所詮しよせんたすかる見こみはないにきまつていらあ」

「ち、畜生！ お、おれは死なないぞ！」

「これ、しずかにしろ」

「お、おれの死ぬときや、き、貴様たちも、地獄へ引^ひばっていくんだ。は、うん、くるしい」

「まだ、喋^{しゃべ}るか」

「だれが、き、貴様たちの計画どおりに——」

「だまれ！」

鬼のような船長ノルマンは、足をあげて、ハルクの顔を、下からうんと力まかせに蹴^け上げた。
上げた。

ハルクの顔からは、たらたらと赤い血がながれだした。

二度目に蹴上げたとき、ハルクは、うんとうなって、その場に悶^{もん}絶^{ぜつ}してしまった。

彼等の秘密計画がばれるのを、ひどくおそれているからのこの暴行ではあったが、それにしても、面倒を見てやらなければならぬ部下にたいして、このひどい仕打は、船長ノルマン——いやノルスキーの脈管にながれている残酷性のあらわれであるとおもえた。

友情

船長ノルマンは、ハルクが、気をうしなつてしずかになつたのを見すますと、倉庫の出入口へ現れた。

「おい、この倉庫は、閉めるから、出る者は今のうちに皆出てこい」

倉庫の中は、もうほとんど一杯だったので、皆は、他の倉庫へ、陸揚の貨物をはこんでいた。残っていたのは、後片附けと見張りのノーマ号の船員数名だけだった。

船長ノルマンは、倉庫の入口を自らみずかびたりととじると、大きな錠じょうをかけた。その鍵は、彼のポケットへ――。

「なにを、ぼんやりしとる。ぐずぐずしていると、もうすぐ夜明けになるじゃないか。はやくむこうへいつて、手伝え」

ノルマンに、口くちぎたな汚なくしかられて、船員たちはあわてて、別の倉庫の方へかけ出していった。

瀕死ひんしのハルクは、ただ一人、とうとうこの倉庫のおくに、とじこめられてしまった。まったく同情に値あたすることだった。このうえは、サイゴン警視庁の活動をまつよりほかないが、まだむこうでは、モロ警部の遭難さえ気がつかない様子だ。

それから、小一時間ほどたつてから後のことだった。巨人ハルクのとじこめられた倉庫の、通風窓つうふうまどにはめられてあつた鉄格子てつこうしが、きいきいとおとをたてはじめた。

きいきいという音は、しばらくすると、ぱたりと止み、それからまたしばらくすると、きいきいと高いおとを立てはじめる。窓からは、セメントが、ばらばらと下へおちる。誰か、通風窓の鉄格子を、ひき切っている者があるのだった。

二十分ばかりたつと、その通風窓から、ぬつと、一つの顔が現れた。

「おい、ハルク」

あたりを忍しのぶようなこえで、倉庫の中へよびかけたが、返事はなかった。

「どうしたのかな。もう一本切れば、なんとか入れるだろう」

ふたたび、きいきいと鉄格子をひき切る音がはじまった。どこから持ってきたか、高こうそ速度鋼くどこうのはまった鋸のこぎりを、一生けんめいにつかっているのは、外ならぬ水夫の竹見だった。彼は、ハルクの身の上をあんじて、この無理な仕事をつづけているのだった。

やがて竹見は、ついに目的を達して、通風窓から、倉庫の中に、ずるずるとすんと、入った。

「おい、ハルク。どこにいる」

竹見は、マツチをすって、あたりを探しまわった。

「あ、こんなところに……」

とうとうハルクの倒れている隅っこを見つけた。

ハルクは、虫の息いきだった。体は、火のようについに。竹見は、おどろいて、空あき瓶びんの中に入れて持ってきた水で、彼のくちびるをうるおしてやった。

ハルクは、やっと気がついたようであった。

「お、おのれ！」

「おい、ハルク、おれだ、竹だ。お前の仲よしの竹だよ、ほら、よく見ろ」

竹見は、マツチをすって、自分の顔を照てらした。だがハルクは、目を開かなかつた。まぶたをあける力もないのであろう。でも竹見のこえはわかったと見え、かすかにうなずき、

「うん、た、竹か。よ、よく……」

よく来てくれた——といたたいのであろう。

「一体どうしたのだ。ハルク。おや、脚をしばったり……。おお。脚が紫色に腫れあがっているぞ」

「へ、蛇だ。ど、毒蛇だ……」

「なに、毒蛇にやられたのか、そいつは災難だなあ」

「いや、ノルマン……」

といいかけて、ハルクは、苦しきのあまり、また昏倒してしまった。

竹見は、おどろいた。何もかも、一ぺんにやりたくて、焦れつたかった。

彼は、ノーマ号へ乗り込んだときからの、この親切な巨人のため、おんがえしのいみで、できるだけのことをした。傷口を、持って来た洋酒で洗ったり、新たに膝のうえで縛り直したり、それからハルクの口を割って気つけ薬を入れてやったりした。

その手篤い看護が効を奏したのか、それとも竹見の友情が天に通じたのか、ハルクはすこし元氣を取り戻したようであった。

「た、竹。おれは、うれしいぞ。おれは、まだ死にはしない」

「うん、死ぬものか」

と、竹見は口ではいったものの、この重症のハルクが再起できるとは、ひいき目にもお

もわれなかった。

「おい、た、竹。おれのズボンのポケットから、水兵ナイフを出して……刃を起せ！」

「水兵ナイフ！ 危いじゃないか」

「いや、は、はやくしろ。そして、おれの手ににぎらせてくれ」

つ の る 蛇 毒

蛇毒にやられて、かびくさい倉庫の床に、氣息奄々きそくえんえんのハルクほど、みじめな者はなかった。常日ごろ、「巨人」という名をあたえられて畏敬いけいされていた彼だけに、今の有様は、なみだなしでは見られなかった。

「おい、竹。どうした、水兵ナイフは……」

と、巨人ハルクは、はあはあ喘あえぎながら、水夫竹見に、さいそくをした。

「うん、水兵ナイフは、あつたが、これをお前がにぎって、どうするつもりかね」

竹見は、ハルクにいわれたとおり、ズボンのポケットから水兵ナイフを出して、刃はを起してやったものの、このときすまされた水兵ナイフを、重態のハルクににぎらせていいものかどうかについて、竹見は迷った。

「はやく、は、はやく、こつちへ呉れ。な、なにをぐずぐずしている……」

「はやく渡せといっても、お前、これをにぎってどうするつもりか」

ハルクは、くるしさのあまり、このナイフでわれとわが咽喉のどをかききって、自殺するのではなからうか、そう思った竹見は、友にナイフを手わたすことを、ためらった。

「ええい、こつちへよこせ！」

とつぜんハルクは、半身はんしんをおこすと、竹見の手から、ナイフをうばった。が、ナイフをうばったというだけのことだ。そのまま、また土間どまにかおを伏せて、うんうんと、高きうなりだした。

「ほら、そんな無理をするから、余計にくるしくなるじゃないか。おい、ハルク、おれが、これから出かけて、医者をさがして、呼んできてやる」

「い、医者なんか、だめだ。お、おれは、自分で、やるんだ」

と、いったかと思うと、ハルクは、とつぜん、むくむくと起きあがった。

「おい、どうするんだ」

ハルクは、無言で、いきなり、ベリベリと音をさせて、右脚の入っているズボンを、ひきさいた。

「竹、おれのバンドをといて、右脚のつけ根を、お、思い切り、ぎゅつと縛ってくれ。早く、早くたのむ」

ハルクは、歯をくいしばりつつ、自分の右の太ももを指した。

「あ、そうか、もつと上を、しぼるんだな」

竹は、ようやく合点がいつて、ハルクがいったとおり、バンドをといて、太ももを、力のかぎり、ぎゅつとしめた。蛇毒は、ハルクのふくらはぎのむすび目をこえて、上へのぼってきたらしい。

「もつと強く、しばれ」

「でも、これ以上やると、皮がやぶけるぞ」

「皮ぐらい、やぶけてもいいんだ。なんだ、お前の力は、それっばかりか」

「なにを。うーん」

竹見は、全身の力を腕にあつめて、ハルクの太ももをしばった。

「うーむ」

さすがのハルクも、竹見が力一杯にしめつけたので、気が遠くなるような痛みに、うな
った。

「これでいいか」

「うん、よし」

と、ハルクはうなずいて、

「竹、お前、向うへいつておれ」

「なんだと、——」

「お前がいると邪魔だ。向うへいつておれ」

「なにをするつもりだ」

「ええい、うるさい野郎だ。見ていてこしをぬかすな。これが、おれのさいごの力一杯な
んだ！」

「えっ」

ハルクの手に、ぴかりとナイフの刃がひかった。と、思うと、懸^かけ声^{ごえ}もろとも、ハルク
はナイフを自分の太ももに、ぐざりとつき刺した。

「おい、ハルク」

「だまっておれ！ くそツ」

ハルクの硬いひじが、いきなり竹見の顎あごを、下からつきあげた。

竹見は、うーんと一声呻うなつて、ふかくにも、その場にどうと倒れて、気をうしなつてしまった。

ほど経へて、竹見が、再び意識をとりもどして、その場にむっくり起きあがったとき、彼は、ハルクが、ついに自ら、片脚を見事に切断しているのを発見して、愕おどろきもしたし、また感歎もした。

ハルクは、血の海の中に、うつ伏せとなり、水兵ナイフをそこへ放りだしたまま、虫の息となっていた。おそるべき大力だった。おどろくべき気力であった。何をどうしたのか詳つまびらかではないが、蛇毒をうけて瀕死ひんしのハルクは、ついに自らの手で、自分の太ももを切断することに成功したのだ。

竹見ほどの豪胆者ごうたんものも、この場の光景を見たときに、なにかしら、じーんと頭のしんにひびいた。

死しりよく力

ハルクの呼吸は、発動機船のように、はやい。

「おい、ハルク。しつかりしろ」

竹見が、いくど声をかけても、ハルクはもう、一語も返事をしなかった。

ハルクを抱きおこして、その口にブランデーを注ぎこんでやろうとしたが、ハルクは歯をくいしばって、口をひらかなかった。彼の顔面は、紙のように蒼そうはく白になっていた。

「おい、ハルク。死ぬな。死んじや、いけないぞ。おれは、医者をさがして、ここへ引張ってくる。それまでは……」

水夫竹見は、そこで声が出なくなつた。そこで両眼をぎゅつとこすりあげ、

「それまでは、死んじやならないぞ。気をしつかり持っているんだ！」

竹見は、この世の中に、ハルクが、一等彼の愛する人間であるように思われてきた。なんとかして、ハルクを助けてやらなければならぬ。

彼は、立ち上った。

(このまま、ハルクをここに残しておいて、大丈夫かしらん?)

想おもいは、ハルクの一つのすういき、一つのはくいきにかかつて、心配は限りない。だが、このままぐずぐずしていれば、結局ハルクは、死との距離をだんだんつめていくばかりであろう。なんにしても、早く医者をここへ引張つてきて、解毒げどくの注射をうってもらうとかして、正しい手当をうけさせねば駄目である。

竹見は、ついに最後の決心をして、

「ハルク、頑張っているんだぞ」

と、彼の耳許に叫ぶや、破つたまどをよじのぼり、外に出た。が、彼は、うしろがみをひかれる想いであつた。

(なぜ、おれは、こうして、急に気がよわくなつたんであろう?)

竹見は、自分の心をしかりつけた。しかし彼は、ハルクのそばをはなれていくのが、いやでいやで仕方がなかつた。

それも、無理からぬことであつた。後に、そのときのことだが、思いあわされたように、竹見にとつては、これが良き仲間ハルクとの永遠のお別れであつたのだ。いくたびか、悪

船長ノルマンの暴力から、竹見を救い出してくれた巨人ハルク！ 身体の大きいに似合わず、母親のように、親切にしてくれたハルク！ そのハルクとは、このとき限り、再び手をにぎる機会を逸してしまった竹見であった。

こっちは、船長ノルマンであった。

ノルマンは、さんざ、巨人ハルクを、利用するだけ利用したうえ、ハルクが毒蛇のためにかまれて、もう再起する力がないと見るや、れいこくにも、ハルクを倉庫の中にしてしまった。

彼は、倉庫の鍵をもっていたから安心してきっていた。まさか、あの倉庫の通風窓つうふうまどが破られることなどは、勘定に入れておかなかった。だから、鍵を自分のポケットにしつかりにぎっているかぎり、誰もハルクの傍に行くことはできないものと信じていた。

（いずれ、あとでもう一度いつてみよう。ハルクは、たぶん息をひきとっているだろうから、そうしたら、後に面倒のおこらないために、倉庫の中に穴をほって、ハルクの死体をうずめてしまおう）

船長ノルマンは、自分たちに都合のよいことばかりかんがえ、そして万事ばんじて手ぬかりのないうように、先の段取だんどりを、心のうちに決めたのであった。そこで彼は、モ口殺しのことも、

ハルクを捨てたことも、知らん顔をして、悠々ゆうゆうと火薬船ノーマ号へもどってきたのであつた。

船では、怪人ポーニンが、彼のかえりを、今か今かと待ちかねていた。

「おお、ノルマン。遅かったじゃないか」

船長ノルマンが、部屋に姿をあらわすと、ポーニンは、手にしていたハイポールの盃さかずきを下において、つかつかと入口へ、ノルマンを迎えに出た。

「どうも、骨をおりましたよ」

そういつて、ノルマンは、ポーニンが、もつとなにか云い出しそうなのを手でせいして、入口のとびらを、ぴつたりとじた。

「おい、結果を早く聞こう。あれは、どうした。そのすじの密偵いぬを片づけることは？」

「あははは、もう安心してもらいましょう。あいつは二度と、この船へはやって来ませんぜ。万事すじがきどおり、うまくいきました。蛇毒じやどくで昏倒こんとうするところを引かかえて、

あの雑草園の下水管の中へ叩きこんできました。死骸は、やがて海へ流れていくことでしょうが、それは永い月日が経つてのちのことです、そのときは、顔もなにもかわっているし、この船も、このサイゴン港にはいないというわけです」

「そうか。それはよかった。ハルクには、特別賞をやらにやなるまい」
「そのハルクも、序ついでに片づけておきましたよ。万事ほんじ片づいてしまいました。あとは、一意、われわれの計画の実行にとりかかるだけです」

怪しき男

そういつているとき、部屋の扉を、とんとんとたたいた者があった。

ポーニンとノルマンは、顔を見合わせた。

「誰だ」

と、ノルマンが声をかけると、

「はい、私で……」

と、はいつて来たのは、事務長だった。

「なに用だ、事務長」

「なんだか、へんなやつが、船へやってきましたよ。ロロー船長がこっちに来ていないでしようか、と、たずねているのです」

「なに、ロロー船長？」

ロロー船長というのは、警部モロのことだった。彼のことなら、もうとくのむかしに、この世から息を引取っているのだった。船長ノルマンは、ポーニンと顔を見合わせて、意味深長な目くばせを交わした。

「船長ロローは、上陸したが、なにか用事があって、まだ帰ってこない——と、そういえ」

「はい」

「それから、なにか用なら、聞いといてやるからと、そういつてみる」

「はい、かしこまりました」

事務長は、出ていった。

船長ノルマンは、ポーニンの方に、身体をすりよせ、

「ごらんなさい。さつそく警備庁の連絡係が、ロローのところへおのりこんできたんですよ」

「ふん、あの一件を嗅ぎつけたんだらうか。それとも、平靖号の乗組員が、こっちを裏切つて、密告したんだらうか」

「さあ、どつちですかね。ねえ、ポーニンさん、ともかくも、そのすじの奴等に雑草園を
しらべられると困りますから、それを胡麻化ごまかすため、例の骨折賃ほねおりちんの饗宴きょうえんを、すぐさ
ま雑草園で始めてはどうでしょう。わいわい酒をのんでさわいでいりや、なにがなんだか、
わかりませんよ。そのうちに夜が明ける。荷役にやくが終る。おひるごろには、このノーマ号も
平靖号も、サイゴン港を、おさらばする。ちようどだん取がうまくはこぶじやありません
か」と、船長ノルマンは、なかなか悪智恵わるしえをはたらかず。

「ふん、それでよかろう。では、さつそく、雑草園で、大盤ふるまいをはじめよう。お前、
みなにそう伝えろ。船にのこっているやつも、できるだけ、上陸させてやるがいい」

「ええ」

「どうする、その大盤ふるまい始めの命令は。お前がもう一度上陸して、伝えることにす
るかね」

「いや、私はここにいます。そして事務長を上陸させましょう。」

「お前は上陸しない。なぜだ」

「雑草園には、あなたや私がいけない方がいいのですよ。いりや、またそのすじのやつなど
につかまって、こつちも、したくない返事をしなきゃならない。われわれがいけないで、み

なに勝手に飲ませて、大いにわいわいさわがせておけば、官憲が調べようたって、手のつけようがありませんよ」

「ふむ、なるほど。それは名案だ。じゃあ、事務長をよんで、お前から上陸命令をつたえろ」

「よろしゅうございます」

こうして、二人の巨魁きょかいは、ノーマ号に残っていることになった。

一方、竹見は、サイゴンの町に急ぐと、医者をたずねてまわった。

だが、なにしろ深夜のことではあるし、竹見の風体ふうていがよくないうえに言葉がうまく通じないという有様で、医者に来てもらおう交渉は、どこでも、なかなかうまくいかなかった。(ちえつ、ぐずぐずしてりや、ハルクの奴は冷くなってしまう！)

と、竹見は、気が気でないが、相手の病院では、一向うごく気配けはいがない。でも、最後の一軒で、ようやく蛇毒じやどくを消す塗薬ぬりぐすりを小壘こびんに入れてもらうことができた。

竹見は、それで満足したわけではなかったが、ハルクを、あまり永く放りぱなしにしておくこともできないので、ようやくにして得た塗薬の小壘を握ると、再び、倉庫へ引きかえした。

そのころ雑草園には、荷役に従事した人夫や船員たちが押しかけ、思いがけない深夜の大盤ふるまいに、飲む食うおどる歌うの大きわぎの最中だった。

竹見は、そのさわぎをよそにハルクのねている倉庫の中にとびおりた。

「おい、ハルク。どうだ、容態は？」といったが、竹見は、けげんなかお！

「おや、ハルクがいない。あいつ、動けるような身体じゃないのに、どうしたんだろう？」

さんばし
棧橋

竹見は、大きな心痛のため、気が遠くなりそうだった。

「このまま放っておいては、たいへんだ。よし、どんなにしても、ハルクをさがしあてないじゃないぞ」

それから水夫竹見は、気が変になったようになって、重態の恩人ハルクをさがしまわった。

倉庫裏のせまい路地を、彼は鼠のようになかしまわりもした。雑草園の饗宴のどよめきに気がついて、ふるまい酒にさわいでいる仲仕なかしや船員たちの間をかきわけて、ハルクのすがたをさがしもとめてもみた。路傍のねころがっている人をゆりうごかして、たずねてもみた。だが、一切の努力は無駄におわった。

水夫竹見は、がっかりしてしまった。

彼は、疲労の末、魂のぬけた人のようになって、棧橋のうえに佇たたずんだ。

「まさか、ハルクのやつ、この棧橋から、とびこんだんじやあるまいな」

そういつた彼は、もう動くのもいやになるほど、疲れ果てていた。彼はいつの間にか、棧橋のうえに、ごろりとたおれていた。涼しい夜風が快い眠りをさそったのだ。

「おい、おい！」彼は、目がさめた。だれを呼んでいるのであろうと、目をみらいてみると、眩まぶしい懐中電灯が、彼のかおをてらしていた。彼はびっくりして、跳はねおきた。

「だ、誰だ！」

「なんだ、やつぱり竹じやねえか」

「そういうお前は……」

「誰でもねえや。おれだ。丸本だ！」

「えつ、丸本、なんだ、貴様だったのか。ちえつ、おどかすない」

丸本というのは、竹見と同じく平靖号乗組の水夫で、彼のいい相棒あいぼうの丸本秀三だった。丸本は、彼のかたわらにすりよつて、

「こら、あんな雑草園のふるまい酒ぐらいに酔いたおれるなんて、だらしがないぞ」

「冗談いうな。おれは酔つちやいない」

そこで竹見は、手短かに、ハルクのことをはなして、丸本にもハルクを見かけなかったかとたずねたが、丸本もやはり知らないとこたえた。竹見は、いよいよ落胆らくたんした。

「おい、ハルクのことをしんぱいするのもいいが、ちと、虎隊長のことも考えてくれ。隊長は、雑草園へもいかなんだ。がっかりしているらしいが、色にも出さないで、平船員の部屋で本をよんでいるよ。お前も何か、隊長にいつて、元氣をつけてあげてくれ」

いわれて竹見は、気がついた。

「おお、そうか。虎隊長は、いまは平靖号の船長ではなくなって、さぞさびしいことだろう。おれは、ひよつとすると、ハルクが、平靖号へにげこんでやしないかとも思っていたところだから、これから一緒に平靖号へ帰ろうじゃないか」

「うん。帰るといふのなら、ちようどいま、ランチが一せき、あいているんだ。おれは、

それによつて帰ろうと思つていたところだ。じゃあ、ちようどいい」

丸本は、竹見をうながして、棧橋のうえを、ランチの方へと歩いていった。

二人が、ランチの索ひもをといているところへ、また一人、飛ぶように駈かけつけてきた者があつた。

「おーい、そのランチ、待て」

「だ、誰だ」

「おれだ」

飛びこんできたのは、これも平靖号乗組の一等運転士の坂谷だった。

「おや。一等運転士。どうなすつたので」

「うん、雑草園でぐいぐいと酒をあおつていたんだが、妙に船が気になってなあ。それでぬけて来たんだ」

「えつ、そうですか。妙に船が気になるなんて、どうしたというわけです」

「どうもわからん。こんな妙な気持になつたことは、初めてだ」

「ははああ、虎船長のことが、やっぱり心配になるんでしょう」

「いや、船長のことは心配しなくともいいんだが、船のことが、いやに気になってねえ。」

ともかくも、早くランチをやれ」

「へえ、合がってん点です。おい、竹見、考えこんでないで、手つだえよ」

「なんだ竹もいるのかね」

「へい、一等運転士。そういえば、わしもなんだか船のことが気がかりなので……」

「よせやい、竹。お前の心配しているのは、ハルクのことじゃないか。いやに調子を合せ
るない」

「うん、ところが、おれも急に今、船のことが気がかりになってきたんだ。どうもへんだ
ねえ」

「ふん、何をいい出すか……」

そこでランチは、沖おきあ合に信号灯の見える平靖号さして、波をけ立てて進んでいっ
た。

ちぞめ
血染の手紙

ランチは、平靖号の舷側げんそくについた。

「いやに静かだねえ」

「そうでしょうとも。虎船長のほかに、だれもいないんですよ」

「まさかネ」

三人は、するすると縄梯なわぼしごのぼつて、甲板かんばんへ――。

「隊長！ 虎隊長！」

一等運転士は、気になるものと見え、虎隊長のところへ、とんでいった。

隊長は、平船員のベッドにもぐりこんで、暗い灯火の下で、本を読んでいたが、とつぜん帰ってきた三人の顔を見て、たいへんよろこんだ。

「隊長、るす中なにかかわつたことはありませんでしたかねえ」

と、一等運転手は、わざと何気なにげなき体ていで、それを尋ねた。

「船のことかね、それとも、わしのことかね。どっちも大丈夫さ。心配するなよ」

と、破顔はがんたいしやう大笑したが、途中で、急に改まった調子になり、

「――そういえば、思い出した。さつき、丁度ちやうどこの真上の甲板あたりで、がたんと、大

きな音がしたんだ。なにか、物をなげつけたような音だった。行ってみようと思つたが、あいにくそは生憎傍にはだれもいないし、そのままにしておいた。あれは何の音だったか、だれかいつて、見てくるがいい」

「はあ、この真上の上甲板あたりでしたか。その音のしたのは？」

一等運転士の坂谷と、水夫竹見とが、一緒にそこをとびだした。

かけ駈あがつた二人は、甲板のうえを探しあつた。

「あつ、これだ！」

一等運転士が叫んだ。

竹見が、かけつけてみると、一等運転士は、いっちょう一挺ジャックの水兵ナイフをにぎっていた。

「おや、血が……」

竹見の心臓が、どきんと大きく波うった。

「あつ、それはハルクの持っていた水兵ナイフだ！」

「えつ？」

ハルクの持っていた水兵ナイフが、なぜこんなところにあるのだろうか。そのナイフこそは、ハルクが自ら右脚をきりおとしたナイフだった。

「おい、なにか手紙みたいなものが、えにまいてあつたぞ」

「手紙？」

一等運転士の手には、手帳の一頁をひき裂いたものが、にぎられていたが、それも血にそまつていた。

「なに、ほう、これは竹見、お前あての手紙だ」

「なんですつて、何と書いてあるんですか」

竹見には、英語がよくよめない。手紙は、英文だった。

「こういうんだ、親愛ナル竹ヨ。俺ハ復讐ヲスルンダ。コノ手紙ヲ見タラ、才前ノ船ハスグニ拔ばつびよう 錨シテ、港外へ出口。ハルク” どういう意味だろうか、この手紙は」

「えつ、復讐！ 復讐は、わかるが、お前の船は、すぐにいかりをあげて、港外にでろと
いうのがわからない」

「ふむ、お前に喧嘩を売るんだつたら、親愛なる竹よは、へんだね」

「あつ、そうだ！」

と、竹見は、とつぜん弾はじかれたように、とびあがった。

「一等運転士、すぐに抜錨を命じてください。でないと、この船は沈没しますぞ」

「なぜだ、とつぜん何をいう。なぜ、そんなことを」

「さあ、すぐ抜錨しないと危険です。一秒を争います。さあ、命令を……」

「おお、この事かなあ、さつきからの、わしのむなさわぎは！」

一等運転士は、やつと、自分のむなさわぎに關係をつけ、すぐさま船長のところへ、おどりこんだ。

「大至急、抜錨。総員、部署につけ！」

「な、なんだつて！」

総員といつても、集まつてきたのは、たった七人だった。七人で、抜錨ができるか。でも、大至急、それをやる命令が、一等運転士によつて発せられた。

虎船長は、かつがれて、船橋へ。すべて非常時のかまえたつた。

汽缶きかんには、すぐさま石炭が放りこまれた。間もなく蒸気は、ぐんぐん威力をあげていつた。

「避難演習かね、これは」

「だまつて、はやくやれ！ 本物なんだぞ」

「気はたしかかね」

「お前、死にたくないのなら、黙って、命ぜられたとおりにやれ！」

水夫竹見は、ハルクを信じていた。だから、この大切な平靖号を、一秒も早く港外にうつさないで、取りかえしのつかぬことが起ることを信じていたのだ。その一大事が、どんな形で現われるか、そんなことを考えている暇ひまは、今の彼にはなかった。瀕死のハルクが、平靖号の甲板へ、血染めの水兵ナイフをなげこんでいったというそのことが、いかに驚異的であるか、それが分れば、まっしぐらにハルクの忠言に従うよりほかなかったのであった。

大椿事だいちんじ

信仰のあつき一等運転土坂谷も、これまた、出来事の真相は、よくのみこめないが、靈感にもとづいて、死力をつくして出航を急いだ。

エンジンは、ようやくうごき出した。しかしいかり錨は、なかなかひき上げられなかった。こ

れには、一等運転士はよわってしまつたが、

「早くやるんだ。じゃあ、錨は、そのままにしておいて、船を出せ。全速力！ 全速力でやるんだ」

「全速といつても、錨が……」

「かまうことはない、錨びようさく索はフリーにしておいて、船を走らせるんだ」

船は、うごきだした。だから、錨索は、がらがらと船内からくり出していった。

「全速まで、早くあげろ。錨索を切つてしまえ」

そんな無茶な命令を、聞いたことがない。

「よし、おれがやろう！」

竹見は、大きなハンマーをかついで、甲板へとびだした。彼は、力一杯、走る錨索の上を、がーんと、どやしつけた。しかしそんなことで錨索は切れない。

そのうちに、とうとう錨索は、ぴーんと張つてしまった。船はエンジンをかけているが、錨のために、もはやすこしも前進しなくなつたのだ。

「だめです。一等運転士。錨が上らなきや、もうどうしてもうごきません」

「もつと石炭を放りこめ、蒸気が、まだ十分あがつていないじゃないか」

「だめです。そんなに早くは……………」

「石炭！ 送風機！ バルブ全開！ 錨を切つちまにや……………」

ガーン。ガーン。

竹見の傍に、丸本もやってきて、どっちも重いハンマーをふりかぶって、錨索のうえに打ちおろす。錨索は、繰り返えされる衝撃のため、だんだん熱してきた。

ガーン。

がらがらから、どぼーン。

「ああ、切れた！」

つよく錨索が引張られていたところへ、二人のハンマーが調子よく当たったので、錨索は、とうとう見事に切断して、水中へとびこんでしまった。

「おお、切れた！ 全速」

平靖号は、弦を切つて放たれた矢のように、水面を滑りだした。

「おお」

虎隊長は、朱盆しゅぼんのようななかおをして、自ら舵器だきを握っている。船は飛ぶ。

平靖号が走りだしてから、それは正二分しょうぶのちのことであつた。天地も崩れるような大

音響が、それに瞬間先んじて一大火光とともに、平靖号をおそつた。

「ああッ！」

「うむ、爆発だ！」

ひゅーと、はげしい風の音とともに、平靖号の真上を、なにものが走り過ぎた。つづいて、ばらばらからがらと、さかんに物が横なぐりに、甲板へとんでくる。竹見と丸本の両水夫は、甲板にうつぶせになつて生きた心地こころちはない。

爆音、また大爆音！

だが、平靖号は、さいわいにして、さしたる損傷もうけなかつた。その大爆音は、はるかにサイゴン港内において頻発しているのであつた。そのものすごい火の海を、なんといつて形容したらいいのであろうか、また天地のくずれ落ちるような大爆音を、なんといつて言い現わしたらいいのであろうか。爆発はまた新たなる爆発を生んで、いつ果つべしとも分らない。

火災だ！ サイゴンの街に火がうつつてもえだした。

「ああ、ハルクの復讐だ！ 彼奴きやつは、ノーマ号のつんでいた火薬に火をつけたのだ！ それにちがいない！」

水夫竹見は、しばらくして甲板からかおをあげ、炎々たる港内の火をきつと見つめながら、うめくようにいった。

全くおそろしい出来事だった。これで、もう二分間おそければ、平靖号も、そば杖づえをくらって、船体はばらばらに壊れてしまい、虎船長以下、竹見も丸本も、今ごろは屍しかばねになつていたかもしれない。

ノーマ号は、あと形なく飛び散った。船長ノルマンも、怪人ポーニンも、ともに一まつガスの瓦斯体となつて消え失せた。それとともに、かのごくひの大計画である海底要塞の建設事業も、一たん挫折してしまつたのだ。この怪人たちの陰謀のそばつえを食つたサイゴン港こそ、悲惨の極きわみであつた。沈没艦船三十九隻、焼失家屋五百八十余戸、死者三千人、負傷者は数しれず、硝子ガラスの破片で眼がみえなくなつた者が、三百余人と伝えられる。

平靖号の船員も、相当死んだが、元氣な虎船長や竹見水夫がいる限り、これにこりず、改めてさらに壯途そうとをつづけることであろう。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第9巻 怪鳥艇」三一書房

1988（昭和63）年10月30日第1版第1刷発行

初出：「大日本青年」（「浪立つ極東航路」のタイトルで。）

※「丸本慈三」と「丸本秀三」の混在は、底本通りにしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2004年3月5日作成

2009年7月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

火薬船

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>